延岡市文化財調査報告書 第26集

NOBEOKA － JONAI

延岡城内遺跡 I

日向延岡新産業都市・都市計画街路本小路通線改良にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

2002.3

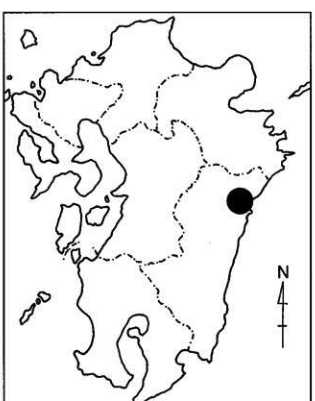
延岡市教育委員会

延岡市文化財調査報告書 第26集

NOBEOKA － JONAI

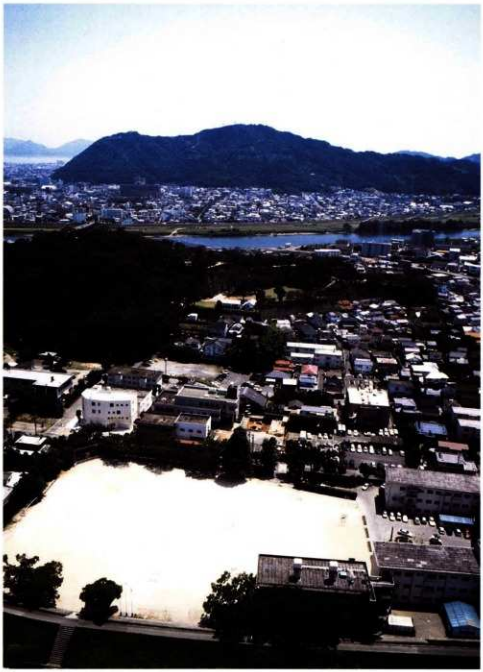
延岡城内遺跡 I

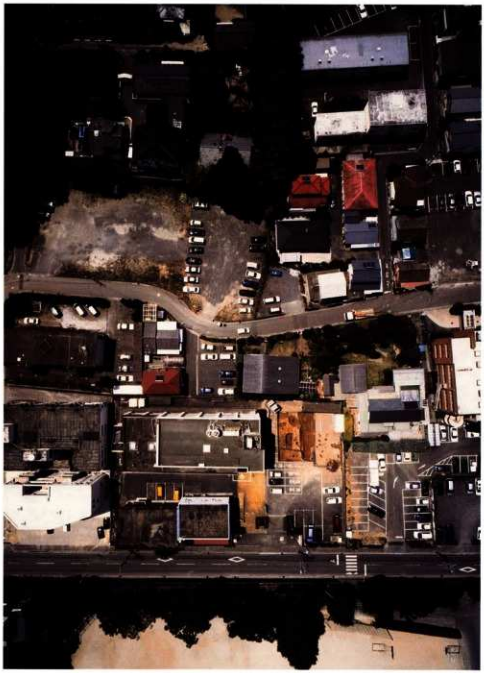
日向延岡新産業都市・都市計画街路本小路通線改良にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書（1）



2002.3

延岡市教育委員会





序　文

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、東は砂浜海岸やリアス式海岸が日向灘に面し、西は高千穂の山々を遠望に望む風光明媚なところです。市内には熊本・大分県を源流とする五ヶ瀬川、祝子川、北川といった一級河川が流れ、これらを利用した豊富な水力発電によって県内最大の工業都市としても知られています。

延岡城跡は、延岡市の中心市街地となっている川中地区に所在し、独立丘陵を中心に南北には各々西から東へ五ヶ瀬川と大瀬川が流れており、これらを天然の要害として選地されています。城の起源は、これまでの発掘調査等によって室町時代頃から中世城郭としての利用が行われていたことが判っていますが、本格的には日向国最大の近世城郭として慶長8年（1603）年初代延岡（県）藩主高橋元種によって築城されたもので、九州管内でも有数の高さ約22㍍に達する壮大な千人殺し石垣をはじめとする石垣群が残り、城の周囲には内堀が巡らされていました。

今回の調査は、一般国道10号延岡道路延岡インターチェンジから市街地へのアクセス道路整備に関連する延岡城下の本小路通線拡幅事業に伴うもので、沿線にある延岡市水道局電気室移転に先だって実施したものです。本事業に関わる発掘調査は平成10年度から実施されており、これまでに城の北側内堀から五ヶ瀬川に通じる水路遺構や城下への出入り口の一つであった清水口などが確認されました。また、本調査においては、武家屋敷に関連する石垣遺構や、これまでの史料では確認されていなかった大溝遺構などが検出され、これまで不明であった延岡城下における武家屋敷の様相の解明に繋がるものとして注目されます。さらに、来年は近世城郭としての延岡城築城四百年を迎え、官民一体となった記念行事等の開催が予定されており、延岡城跡の歴史変遷の解明やまちづくりへの活用が期待されているところです。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助になることを願うと共に、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して、埋蔵文化財の保護にご理解と多大なるご協力を賜りました都市整備部街路公園課をはじめ延岡市水道局、ならびに関係諸氏の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2002年3月

延岡市教育委員会
教育長　牧野哲久

例　言

1．　本書は、日向延岡新産業都市計画道路事業３．４．１９５本小路通線拡幅にかかる水道局電気室移転に先立って、延岡市教育委員会が実施した、延岡城内遺跡（第３次）調査（延岡市本小路77－１）の調査報告書である。

2．　本書にかかわる遺物および記録類の整理には、山田聡、數石サヨ子、山本敬子、藤本千鳥、久米田有美があたり、吉永竜也、數石卓也、山本偉津子、高久伸太郎、山本亮二ら学生諸氏の協力を得た。

3．　本調査にかかわる遺構写真および遺物写真は山田があたった。

4．　本書の編集・執筆には、山田があたった。

5．　本書の、遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準としている。

6．　調査段階においては、遺構名称・番号を検出された順に仮設定して遺構実測及び遺物の取り上げを行った。報告書作成段階において、遺構の規模及び性格等から名称・番号について一部変更を行った。

石組遺構	→	石垣遺構	ＳＳ－１
井戸遺構	→	井戸遺構１	ＳＦ－１
土壙６	→	井戸遺構２	ＳＦ－２
土壙５	→	土壙４	ＳＣ－４
焼土壙	→	溝状遺構１に統合	ＳＥ－１
溝状遺構３	→	大溝遺構	ＳＥ－３
土壙４	→	大溝遺構に統合	ＳＥ－３

7．　報告書掲載の遺物資料は、時間・経費等の制約から残存状態の良好な資料を中心に行い、一部資料は写真・表のみ掲載とした。したがって、掲載資料が本遺跡における遺構・遺物の性格・流通状況を示しているものではないことを予め断っておきたい。

8．　陶磁器類については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館副館長）の多大なご教示・ご指導を得た。また、資料分析にあたっては、渡辺芳郎氏（鹿児島大学法文学部助教授）、柳田晴子氏（宮崎県埋蔵文化財センター）からのご教示をいただいた。

9．　遺構出土炭化物の分析を株式会社古環境研究所に委託した。

10．　本調査にかかわる空中写真は、（株）スカイサーベイ九州に委託した。

11．　本調査では、学校教育で進められている『総合学習』に関連する職場体験学習として、2000年５月30日に市内南方中学校３年生４名による発掘体験を実施した。

12．　本調査にかかわるすべての遺物・記録類は延岡市内藤記念館において、収蔵・管理・公開する予定である。

目　次

第1章　はじめに
1．調査に至る経緯 …… 1
2．発掘調査の組織と構成 …… 1
3．遺跡の立地と歴史的環境・調査の変遷 …… 2
4．延岡城関係年譜 …… 9

第2章　調査の成果
1．調査方法と基本土層 …… 13
2．調査の概要 …… 14
3．検出遺構と遺物 …… 18
（1）石垣遺構 …… 18
（2）井戸遺構1 …… 18
（3）井戸遺構2 …… 19
（4）土壙1 …… 20
（5）土壙3 …… 20
（6）土壙2 …… 23
（7）土壙4 …… 27
（8）溝状遺構1 …… 36
（9）溝状遺構2 …… 39
（10）大溝遺構 …… 43

第3章　おわりに …… 46

自然科学分析調査報告書 …… 63

挿図目次

延岡市位置図
1．延岡城跡周辺遺跡分布図（1／25000） …… 2
2．調査区位置図（1／500） …… 13
3．グリット配置図（1／160） …… 14
4．調査区東壁南北土層断面図（1／40） …… 15
5．検出遺構分布図（1／80） …… 17
6．石垣遺構実測図（1／40） …… 18
7．井戸遺構1実測図（1／40） …… 20
8．井戸遺構2実測図（1／60） …… 21
9．井戸遺構2出土遺物実測図（1／3） …… 21
10．土壙1・3遺構実測図（1／20） …… 22
11．土壙2遺構実測図（1／30） …… 23
12．土壙1・2・3出土遺物実測図（1／3） …… 24
13．土壙4遺構実測図（1／40） …… 26
14．土壙4出土遺物実測図1（1／3） …… 28
15．土壙4出土遺物実測図2（1／3） …… 30
16．土壙4出土遺物実測図3（1／3）（1／4） …… 32
17．土壙4出土遺物実測図4（1／3） …… 34
18．溝状遺構1実測図（1／40） …… 37
19．溝状遺構2実測図（1／60） …… 38
20．溝状遺構1・2出土遺物実測図（1／3） …… 39
21．大溝遺構実測図（1／60） …… 42
22．大溝遺構出土遺物実測図（1／3）（1／4） …… 44

23. その他の出土遺物実測図１（１／４）…… 47
24. その他の出土遺物実測図２（１／４）…… 48

表 目 次

第１～４表　延岡城関係年譜１～４ …… 9～12
第５～10表　延岡城内遺跡（第３次）出土遺物観察表１～６ …… 57～62
報告書抄録

写真図版目次

ＰＬ．１　延岡城跡遠景（空撮）…… 巻頭
ＰＬ．２　発掘調査地点（空撮）…… 巻頭
ＰＬ．３　延岡城ドム絵図（18世紀後半～19世紀前半） …… 8
ＰＬ．４　遺構検出状況（東から）…… 16
ＰＬ．５　石垣遺構検出状況１（西より）…… 19
ＰＬ．６　石垣遺構検出状況２（南西より）…… 19
ＰＬ．７　石垣遺構全景（西より）…… 19
ＰＬ．８　井戸遺構１検出状況（北から）…… 20
ＰＬ．９　井戸遺構１全景（南から）…… 20
ＰＬ．10　井戸遺構２検出状況（東から）…… 21
ＰＬ．11　井戸遺構２出土遺物 …… 21
ＰＬ．12　土壙１・３検出状況 …… 22
ＰＬ．13　土壙１・３完掘後 …… 22
ＰＬ．14　土壙２検出状況 …… 23
ＰＬ．15　土壙２遺物出土状況 …… 23
ＰＬ．16　土壙１・２・３出土遺物 …… 25
ＰＬ．17　土壙４土層堆積状況（西から）…… 26
ＰＬ．18　土壙４全景（西から）…… 26
ＰＬ．19　土壙４出土遺物１ …… 29
ＰＬ．20　土壙４出土遺物２ …… 31
ＰＬ．21　土壙４出土遺物３ …… 33
ＰＬ．22　土壙４出土遺物４ …… 35
ＰＬ．23　溝状遺構１検出状況 …… 36
ＰＬ．24　溝状遺構２遺物出土状況 …… 38
ＰＬ．25　溝状遺構２全景 …… 38
ＰＬ．26　溝状遺構１・２出土遺物 …… 40
ＰＬ．27　大溝遺構全景（東から）…… 41
ＰＬ．28　大溝遺構遺物出土状況 …… 41
ＰＬ．29　大溝遺構北側土層堆積状況（南から）…… 41
ＰＬ．30　大溝遺構南側土層堆積状況（北から）…… 41
ＰＬ．31　大溝遺構出土遺物 …… 45
ＰＬ．32　その他の出土遺物（瓦類）…… 49
ＰＬ．33　その他の出土遺物（瓦類・陶器ほか）…… 50
ＰＬ．34　井戸遺構１・２出土遺物 …… 52
ＰＬ．35　土壙２・４出土遺物 …… 53
ＰＬ．36　溝状遺構１出土遺物 …… 54
ＰＬ．37　溝状遺構１・２出土遺物 …… 55
ＰＬ．38　大溝遺構出土遺物 …… 56
ＰＬ．39　南方中学校発掘体験 …… 62

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

宮崎県北部に位置する延岡市は、県内最大の工業都市として発展していたが、企業の合理化及び若年層の流出に悩まされ、都市基盤のインフラ整備が必要になっていた。中でも、高速道路を中心とした道路整備が遅延していることを指摘されていた。近年になって、東九州高速自動車道の一部である一般国道10号延岡道路建設事業が本格化することになり、これに関連して、天下町に建設される延岡ジャンクション・インターチェンジから市街地へのアクセス道路として、延岡インター線の新規事業及び日向延岡新産業都市計画道路事業３．４．１９５本小路通線（以下、本小路通線という）の拡幅事業が平成９～15年度事業として着手されるに至った。市教育委員会では、延岡城跡に関する周知の埋蔵文化財包蔵地であり発掘調査等の必要性に鑑み、計画段階から担当事業課である都市整備部街路公園課との協議を進めた。その結果、事業予定地が延岡城内遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、事業主管課の経費負担で発掘調査を実施することになった。ただし、事業予定地が道路として供用されているため、拡幅事業に並行して発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、用地買収及び予算面での都合により着手時期の事前把握が困難であったが、平成10年度末より、延岡市健康管理センター前付近から調査着手に至った。当初、発掘調査は道路整備事業に並行しながら順調に進捗していた。ところが、平成11年度末になって拡幅事業による延岡市水道局電気室の移転計画を確認するに至った。これは、発掘調査対象地が拡幅事業箇所のみとする認識不足から生じたもので、急遽平成12年３月に庁内協議を行った。その結果、これまでの事業との調整が充分でなかったことは否めないが、移転事業の着手を早急に進める必要があるため、やむを得ず、事業主管課である都市整備部の経費負担によって市教委が早急に発掘調査を実施するで合意した。

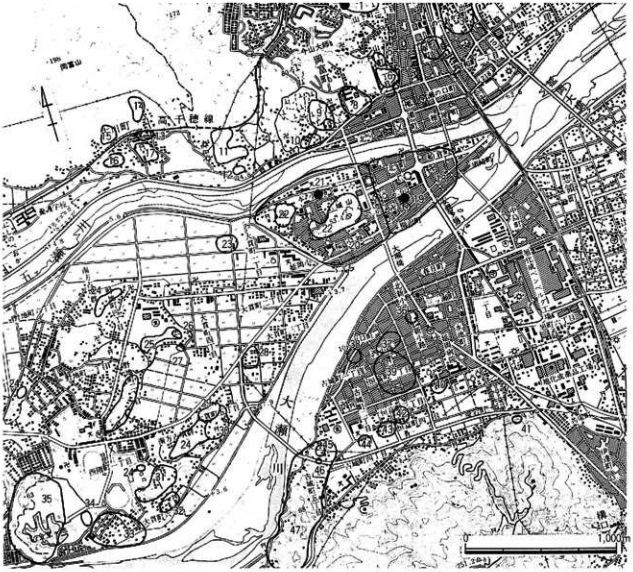
発掘調査は、平成12年５月16日から同年７月28日にかけて実施した。

2．発掘調査の組織と構成

調査主体	延岡市教育委員会		教育長	牧野哲久
調査総括	同	文化課	課長	酒井修平
	同	同	課長補佐兼文化財係長	渡辺博史（平成11年度）
	同	同	文化振興係長	黒木育朗（平成11年度）
	同	同	課長補佐兼文化振興係長	同　（平成12・13年度）
	同	同	文化財係長	髙久昌一（平成12・13年度）
調査庶務	同	同	文化振興係主査	稲田芳子
調査担当	同	同	文化財係主任主事	山田　聡
調査作業	小野愛子、甲斐栄、川名千代子、工藤今朝子、久保利男、黒水克哉、酒井巌、中岩房子、中島千賀、中川イツ子、松崎辰磨			
資料整理	久米田有美、数石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子			

発掘調査・資料整理に際しては、延岡市水道局をはじめ周辺住民など関係各位のご協力を賜った。また、経費執行に際して、都市整備部街路公園課管理係主査　有野公教氏には格別のご配慮をいただいた。記して感謝したい。

3．遺跡の立地と歴史的環境・調査の変遷



1　上ノ坊遺跡（古墳～中世）
2　上ノ坊古墳（古墳）
3　日の出町遺跡（弥生）
4　幸町遺跡（弥生）
5　蓬莱山窯跡（近世～近代）
6　蓬莱山善龍寺跡（近世）
7　神事能舞台跡（近世）
8　岡富小学校周辺遺跡（弥生）
9　高岳寺跡（近世）
10　備後屋敷跡（近世）
11　上多々良箱式石棺群（古墳）
12　県史跡延岡古墳群（古墳）
13　伊勢ノ前古墳（古墳）
14　東大寺跡（不明）
15　古川窯跡（古墳）
16　鴨田遺跡（中近世）
17　赤迫遺跡（古墳）
18　延岡城下町遺跡（弥生～近世）
19　延岡城下町遺跡（第１次）
20　延岡城内遺跡（弥生～近世）
21　延岡城内遺跡（第３次）
22　市史跡延岡城跡（旧石器～古墳）
23　中ノ須遺跡（近世）
24　国史跡南方古墳群
25　肥登遺跡（旧石器～近世）
26　大貫の石人（古墳？）
27　がんがん石（古墳）
28　光運寺跡（中世）
29　大貫貝塚（縄文）
30　浄土寺跡（中世）
31　和田の奥遺跡（縄文～弥生）
32　宮畑遺跡（縄文～古墳）
33　川辺駅跡（古代）
34　丸塚山古墳（古墳）
35　西階城跡（中世）
36　旧誓教寺跡（中近世）
37　西光寺跡（中世）
38　出口町遺跡（弥生）
39　恒富本村遺跡（弥生）
40　和合寺跡（中世）
41　愛宕山洞穴遺跡（縄文～古墳）
42　利生寺跡（中世）
43　春日寺跡（中世）
44　惣泉寺跡（中世）
45　古城貝塚（縄文）
46　古城窯跡（近世～近代）
47　井上城跡（中世）

第１図　延岡城跡周辺遺跡分布図（１／25000）

延岡城跡は、延岡平野の中心部に位置する通称川中地区にあり、城郭を中心に弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。

豊前国香春岳城主（福岡県田川市）の高橋元種は、天正14年（1586）九州平定を進めていた豊臣軍の攻撃を受け降伏、翌天正15年（1587）秀吉の命を受け53000石で日向国県（延岡）に入封し松尾城（市内松山町）に入った。他に県城（延岡城？）、潮見城・日知屋城（日向市）、門川城（門川町）、宮崎城（宮崎市）を領した。慶長５年（1600）の関ヶ原の合戦においては、西軍方に属し岐阜大垣城の防衛にあたっていたが、東軍に転じたことから本領安堵となり領地没収を免れた。初代藩主となった元種は、鉄砲の普及による近代的戦法に対応するため、石垣や水堀を主体とする新城の必要性を認識するに至り、慶長６年（1601）～同８年（1603）にかけて延岡城（県城）を築城した。

延岡城は、五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた丘陵を中心に築かれた平山城で、「県城」又は「亀井城」とも呼ばれた。自然地形を利用して東流する二つの河川を外堀とし、丘陵据には内堀を巡らし、城の東側に位置する城下町との境界には、南北に掘や土居が造られている。城郭としては、丘陵部に石垣を築き、本丸、二ノ丸、三ノ丸から成る本城（城山公園）と西ノ丸（内藤記念館・延岡測候所跡・亀井神社）の二郭から構成され、各曲輪には枡形や門・櫓などが設けられている。内堀は、大手口である城の北側で二重に築いて防衛機能が強化され、内堀の間には泉橋（水道局南側道路付近）、宝橋（城山公園北駐車場付近）と呼ばれる木橋が架かり、有事の際に遮断できる構造になっている。本丸と二ノ丸との間にそびえる高さ22㍍、総延長約70㍍の石垣は、その規模や構造から通称「千人殺し」と呼ばれ、本城を代表する石垣となっている。石材は、行縢山から産出される花崗斑岩、愛宕山産の砂岩（同山の北谷川に石切場跡が残る）、五ヶ瀬川流域で多く産出される阿蘇溶結凝灰岩の自然石や粗割石を利用して石積みが行われている。「千人殺し」とは、石垣の隅石の先端部にある石を外すことで、多くの敵を殲滅させることが出来るとの伝承からこの名称が付けられたものと言われている。また、現在の延岡市街地の町割りの原型となる城下町整備が着手され、城の東側に北町、中町、南町の三町が整備され、武家屋敷地として五ヶ瀬川の北側に北小路、城下の南北に本小路、桜小路が完成した。

慶長18年（1613）元種は、罪人隠匿の理由で改易され、続いて有馬氏が肥前国日之江城（長崎県北有馬町）から五万三千石で入封し、直純、康純、永純（清純）と３代続いた。この間に県城は延岡城に改名＜蓬莱山八幡宮（今山八幡宮）に寄進の梵鐘に「日州延岡城主有馬左衛門佐従五位藤原朝臣康純」＞され、城下町も大幅に拡張整備された。元和元年（1615）直純の時代に元町（今の紺屋町西側）、紺屋町、博労町の三町、康純の時代に大瀬川河原を造成して柳沢町も設立され、いわゆる延岡七町が完成した。承応２年（1653）～明暦元年（1655）にかけて城の大修築が行われ、本丸東側に本城郭の天守閣の機能を有する三階櫓、本丸枡形に二階門櫓などが完成し、翌年今山（蓬莱山）八幡宮に前述の梵鐘（市指定有形文化財）が奉納された。寛文７年（1667）には、五ヶ瀬川にかかる板田橋が架けられ、武家屋敷地も新たに新小路が整備され、高橋元種によって着手された城下町整備も有馬康純の時代に完成した。しかし、天和２年（1682）２月（天和３年説もあり）、本小路の武家屋敷から出火した大火があり三階櫓など悉く焼失した。以後、城郭の復興は行われたが三階櫓は再建されなかったことが古文書によって確認されている。永純の時には、山陰・坪谷（東郷町）の百姓約1500人が隣接する高鍋藩へ逃散する事件（山陰一揆）が起き、その責を問われ元禄５年（1692）無城地、越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）に転封となり、同８年（1695）には越後国丸岡城（福井県丸岡町）に移封された。

三浦明敬は、元禄５年（1692）日向国における初の譜代大名として下野国千生（栃木県千生町）から23000石で入封した。百姓逃散事件の後遺症が残り、藩領も有馬時代の半分以上が幕府領になって

いた。藩名が県から延岡に改名され、正徳２年（1712）に三河国刈谷（愛知県刈谷市）に移封した。

その後を継いだ牧野氏は、三河国吉田（愛知県豊橋市）から歴代延岡藩最大の80000石で入封し、成央、貞通の二代が続いた。日向国臼杵・宮崎・児湯、豊後国大分・国東・速見の一部を領した。寛保２年（1742）、領知80000石のうち日向国児湯・宮崎の３郡30000石を河内国奈良・近江国蒲生・野洲・栗太・甲賀、丹波国桑田・船井・天田・何鹿、美濃国不破の10郡のうちに移され、日向国１郡、豊後国３郡と併せて６国14郡となった。この時期は藩財政も窮乏し、享保13年（1728）～享保16年（1731）までの藩債は70000両にも及んだ。こうした背景から、新田開発、殖産興業等が必要となり、享保９年（1724）家老藤江監物が郡奉行江尻喜多右衛門に命じて岩熊井堰工事を着手させ、同19年（1734）に完成して、出北村の田畑総反別122町１反５畝23歩の増加をみるに至った。延享４年（1747）、貞通は常陸国笠間（茨城県笠間市）へ、笠間の井上氏は陸奥国磐城平（福島県いわき市）へ、磐城平の内藤氏は日向国延岡へ移封する三方所替えが行われた。

内藤氏は、延享４年（1747）70000石で入封し、政樹、政陽、政脩、政韶、政和、政順、政義、政挙の８代にわたり、明治の廃藩置県まで続いた。政樹は、延岡入封によって表向き磐城平藩時代と同じ70000石であったが、飛地や山野が多いことから実質20000石余りの減収といわれ、支配体制整備、殖産興業、財政改革に尽力し、積極的な人材登用による文武振興を行った。郷村統治のため、大庄屋の支配する組を定めて担当代官をおき、豊後、宮崎、高千穂には複数の代官・勘定人をおいた。また、俸禄制を採用し、「知行100石に付き玄米４斗入100俵」と定め、３割６分を玄米渡し、６割４分を銀渡しとした。水戸学派儒学者橘喜太郎・太宰春台門人赤星多四郎などを招聘や、数学者の久留島喜内、松永良弼などの登用をはかった。また、父露沾に俳諧を学んで俳号を沽城とし、露沾に師事した家臣も遂行したことから俳諧が盛んになった。続く政陽の時代には、藩財政が困窮し、明和３年（1766）の藩債は105563両に達し、明和７年（1770）に本知行６制引制となったが、同５年（1768）本小路に学問所（学寮）、武芸所（武寮）を設置し、文武の振興をはかった。政脩の時代は、大明の大飢饉と同時期にあたり、藩内でも農村の疲弊が甘立ち、町人石見屋の小田氏に知行300石で本締方下役を与え、天明７年（1787）に須賀江村（市内須美江町）の復興を請け負わせた。また、大瀬川に須輪間井堰を築いて恒富地区120町の灌漑を行うなどの対策を講じた。政韶は、考古学に関心を持ち西ノ丸や古墳の発掘調査を行い「集古採覧」を記録したといわれる。また、寛政６年（1794）には植物方を設置し、杉、ハゼなどの植林・管理を行った。政義は、彦根藩主で大老であった井伊直弼の弟で、直弼の姉充姫（繁子）は後に充真院となった人物である。領内においては、天保12年（1841）、嘉永元年（1848）と飢饉が続き、藏米の放出穀物による酒造禁止や、新田開発を行った。しかし、財政の困窮は進み、打開策として石見屋の小田氏を藩本締方頭取取扱格として知行406石を与えた。この頃、領内の木炭産出量が急増し、大阪市場における在郷問屋の活躍が目立つようになった。また、洋式砲術の採用や学問の必要性を説いて、方財海岸（延岡市）での大砲試射、嘉永３年（1850）学寮を拡充して広業館に改称、安政４年（1857）南町に医学所明道館開設など行った。政挙は、11歳で家督相続し、幕命を受け第１次長州征伐（1864）、第２次長州征伐（1865）に参加した。慶応３年（1867）第15代将軍徳川慶喜の大政奉還を受け、日向国内の幕府領を他藩と共に預かった。同年12月王政復古の大号令後、明治元年（1868）鳥羽伏見の戦いで徳川氏の命により京都郊外の野田口を守備した。日向諸藩が倒幕側に立っていたため孤立し、朝敵の嫌疑を受け入京を差し止められ、謹慎・糾問を受けた。その間、薩摩藩の使者が来て、新政府への忠誠を要請された。同年５月謹慎を解かれ、甲府城番の応援を求められた。明治２年（1869）豊後国延岡藩領20700石余と日向国口田県管轄36000石余の交換を行った。同年６月の藩籍奉還によって知藩事が任命され、政挙は延岡藩知事となり家禄は2891石となった。明治４

年（1871）、廃藩置県によって藩知事を免職して東京府華族となり、麹町華人町に在住した。明治５年（1872）明治の廃城令とともに各地の城郭の取り壊しが行われた。延岡城では、明治４年（1871）６月に「藩城ヲ廃シ楽園トナス」との記録があり、この時期に城の機能を廃止して取り壊しが行われた可能性があるが、明治10年（1877）頃まで京口門が残っていたこと（内藤家家令・小林天外氏の談）や、同年８月にあった西南の役の際、天守台の太鼓櫓が焼失した記録等があり、破却に関する詳細な記録は確認されていない。

政挙は、同23年（1890）７月31日東京より帰延し、旧図書館付近にあった内藤松蔵宅（内藤政義の末子・内藤の下御殿とも呼ばれた）に居住、同25年（1892）２月西ノ丸跡（現内藤記念館付近）に新築した屋敷（御殿）へ転居した。政挙は、教育事業普及に尽力し、同６年（1873）１月４日延岡社学（現岡富中学校付近）を設立し、同８年（1875）１月22日亮天社と改称、同36年（1903）４月の県立延岡中学校設立に伴う廃校まで支援した。また、女子教育の振興のため同９年（1876）４月に亮天社付属として女児教舎を設立、明治34年（1901）４月私立延岡女学校と改称、昭和２年（1927）政挙没後、同４年（1929）４月内藤家より８万円の維持費とともに敷地建物を県に寄付し県立延岡高等女学校となり、戦後の学制改革まで続いた。

城山公園は、遅くとも明治40年頃には市民に開放されたとみられ、公園内で撮影された写真が残っている。昭和９年（1924）４月、内藤政道氏から延岡市制施行を記念して城山公園の寄贈、翌年に昭和天皇の延岡行幸に伴う公園整備が実施され、同14年（1939）８月には、西ノ丸及び御殿の寄贈を受け、内藤記念館として市民に開放された。戦後、城山公園は市民動物公園として猿ヶ鳥などの整備が行われ県内外から多くの観光客が訪れていたが、各地に遊戯施設や動物園等の娯楽施設がつくられレジャーの多様化もあって客が減少し、同63年（1988）に殆どの施設が解体されている。

本調査地付近の歴史変遷を辿っていくと以下のとおりである。まず、高橋元種の近世県城（延岡城）築城時に行われた城下・城下町整備によって武家屋敷が造られた。有馬氏時代には、17世紀後半に描かれた「有馬家中延岡城下屋敷付絵図」によると、有馬氏部・町原三之允といった家臣の屋敷となっている。三浦氏時代は不明であるが、牧野氏時代になると、18世紀前半に描かれた「日向国延岡城絵図」に、会所・中川武右衛門（使番・100石）の記載がみられる。内藤氏時代の18世紀後半～19世紀前半に描かれた「延岡城下ノ図」（PL.３）によると本多三郎左衛門・今村庄右衛門の屋敷が存在していた。藩政時代最後の1868年頃に描かれた「明治元年前後延岡藩士族屋敷図」によると、武寮・塚本運平・忍左司馬の屋敷となっていた。明治維新後は、明治10年（1877）の西南の役の際、城下の一部は戦火に包まれたが調査地付近の屋敷が罹災した記録は確認されていない。昭和13年（1938）３月、県立延岡高等女学校（現岡富中学校敷地）の寄宿舎建設のため、父兄後援会、藤藤会、郡市の補助を受け、本調査地を含む現水道局敷地778坪を14000円で買収し、同15年（1940）８月木造平屋の寄宿舎２棟が完成した。しかし、同20年（1945）６月の延岡大空襲によって寄宿舎は焼失、同22年４月寄宿舎は再建されたが、翌年４月の学制改革により県立延岡高等女学校は廃され、県立岡富高等学校が設置された。さらに、同24年（1949）４月、県立高等学校の通学区域制実施に伴い、県立岡富高等学校を廃して県立延岡恒富高等学校（現県立延岡高等学校）に統合され、施設等は市立岡富中学校に引き継がれた。同28年（1953）４月頃、本市の上水道整備事業が本格化するのに伴せて、旧寄宿舎内に市上下水道建設事務所（後の水道課）が設置された。その後、施設の老朽化等によって、同45年（1970）４月に集中管理棟、同55年（1980）３月に現水道局本館、同58年（1983）12月には集中管理棟西棟が増築され現在に至っている。

延岡城跡に関わる発掘調査の歴史は古く、前述したように江戸時代後期の内藤政韶によって西ノ丸

の調査が行われてたのが最初と言われている。その後、大正～昭和時代にかけて、二ノ丸北曲輪（牧水広場）の東斜面から横穴３基が確認されている。何れも開口時期は不明であるが、北曲輪から発見されたものは、羨道高３尺６寸、同横３尺５寸、同長４尺、玄室奥行６尺２寸、同横６尺、同高４尺２寸あり、土器、金環類が発見されている。

平成元年度より、本城の城山公園では都市景観形成モデル事業に関連する公園整備がスタートしている。まず、公園用地拡充に重点を置いて用地買収を先行し、平成３年度から公園内の施設整備に伴う発掘調査や絵図史料などの古文書調査を年次的に行っている。

北大手門は、城の北側玄関口に位置し、現在公園北駐車場（内堀跡）から直進して行くことができる。延岡城絵図（慶応大学付属図書館蔵）によると桝形門と呼ばれ、当時の通路は、内堀に宝橋と呼ばれる木橋が架かり、そのまま直進してニノ丸石垣の手前で左に折れて内藤家邸所を通り、ニノ丸北曲輪（牧水広場）の石垣手前で右に折れ北大手門前に出る構造になっていた。現在でも、内堀跡南側に残存する石垣には、北大手門へ向かう通路排水溝の石樋が２カ所露出しており、宝橋の架橋地点を見ることができる。北大手門の調査では、門礎石の基礎（桁行約5.4m、梁行2.7m）、底を平瓦で敷かれた排水溝、門番の番所跡とともに、刻銘「御用　甎屋吉出三太郎」の日板瓦が確認されている。また、門の両側にある石垣から袖塀の屋根部分が接していたことを示す溝が見つかっている。さらに、門の両側石垣（殆ど東側のみ）には、約10cm～40cmの大きさに刻まれた刻印と呼ばれる記号が400個以上確認され、これほど１カ所に集中して刻印がみられる城はあまり例がない。石垣を寄進した家臣や関係者、若しくは石積に際しての記号などと言われ詳細は分かっていない。しかし、一定の範囲に刻印を持つ石垣があることや、同刻印が２～３個の石材をおいて等間隔若しくは一定の方向に並んでいることなど規則的な配置が見受けられることから、刻印のもつ機能・用途を検討する上で重要な資料となっている。

二ノ丸口からは、日向国延岡御本城御要害絵図（明治大学刑事博物館蔵）等にも記載されている２カ所の井戸跡が検出された他、本丸側の斜面下回りに石垣が巡らされていることが判明している。

ニノ丸からは、石組みの排水溝または通路とみられる遺構や、直径約５mにも及ぶ大規模な瓦だめ（有馬家家紋入り鬼瓦出土）の他、城内最大の井戸（直径３m、深さ13.8m）が存在し、城内における主要曲輪として位置づけられていたものと推定されている。この他、造成面下層の地山層から弥生時代後期の土壙墓１基（両短側辺に緑色岩を立てる）が検出されている。

ニノ丸から本丸にかけては、千人殺し石垣に沿って階段跡、階段を登った地点に長坂御門跡、同門跡から左に折れ進み本丸石垣手前を左に折れた地点に城内最大の門である二階門櫓が存在していたことが確認されている。長坂御門周辺からは、牧野家の家紋入り瓦や鯱瓦片が見つかっている。二階門櫓（桁行16.8m、梁行5.9m）は、渡櫓形式に属するもので２階部分を本丸石垣の上にのせられていた。各種絵図史料にも記載され、礎石跡、排水溝、階段跡などが見つかっている。現在、公園整備で階段の復元や門礎石の表面表示などが行われ、公園内でも最も城郭らしい景観になっている。また、長坂御門の斜め上方に位置する千人殺し石垣の南角は、明和６年（1769）７月28日に起きた日向灘地震によって一部崩落しており、その後の修築跡が見受けられる。この他、長坂御門から左に折れた通路上には、南北方向に通路を遮断するよう造られた中世の堀切が確認され、近世延岡城（県城）築城以前の中世県城？の存在を裏付けるものとして注目されている。

本丸では、北東側に設置されている便所付近から絵図史料に描かれた土塀に関連する控柱跡の他、天守台へ通じる道路上から階段跡が確認されている。

天守台は、城内でも最高位（標高53.4m）にあたる。絵図史料では、太鼓櫓とみられる建物以外の

記載はなく、発掘調査の結果、いわゆる天守閣のような櫓の存在を示す石垣等は存在せず、天守が存在しない城であったことが判明している。そのため、1段下の本丸東隅にあった三階櫓が本城郭おける天守の機能を有していたものと考えられている。また、天守台付近の通路は現在より約10mほど手前から右に折れて階段によって天守台に通じていたことが判っている。この他、現通路の天守台側斜面には、築城時又は中世城郭の痕跡と考えられる石垣の一部が露出している。

城山公園南駐車場（中小企業センター裏）の調査では、絵図史料に記載されている米蔵や武具蔵の一部が確認されている。同駐車場入り口拡幅に伴う歩道の調査では、本城の東側を廻っていた内堀が確認され、堀底が南に向かって上方に傾斜していることから堀の端部付近と考えられている。

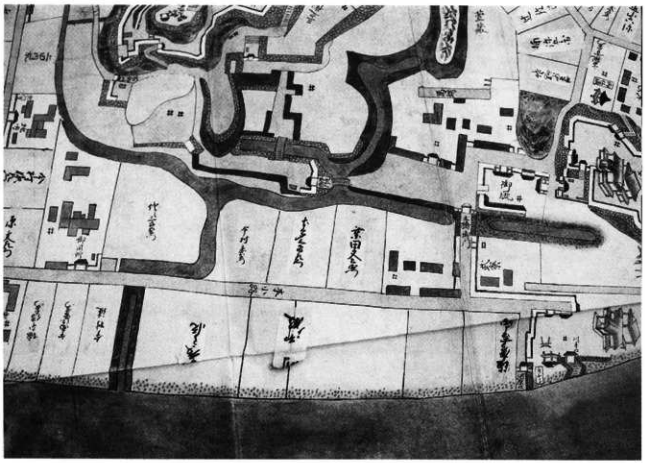
カルチャープラザのべおか建設に伴う発掘調査では、東西方向に築かれた素掘りの内堀（幅約14m、深さ約4m、長さ24m以上）が検出されている。断面形は逆台形を呈し、土手には長さ約1.5mの松杭が打ち込まれ間には栗石が敷き詰められ、幕末～明治初期に廃棄されたと見られる大量の肥前・瀬戸美濃・三田・京焼系・関西系などの陶磁器類が検出されている。また、高橋元種時代の絵図史料のみに記載される南北方向の内堀が、東西堀とL字形に接するように確認され、築城時の城郭構造を知る上で貴重な資料が得られている。この他、馬屋跡や井戸跡をはじめ中世の掘立柱建物跡、県内初となる弥生時代後期後半の足跡や矢板、鍬などの木製品や土器類が確認されている。

本小路通線改良に伴う調査では、西側の堀防に接する地点付近から清水口の門跡が確認され、城下と城外との接点である門跡の一つとして初めて確認された他、本小路北公園付近から内堀から五ヶ瀬川に通じる水路遺構（堀跡）及び本小路通線を跨ぐ暗渠遺構が検出されている。

近年になって、徐々に延岡城跡周辺の市街地でも発掘調査が行われるようになっている。東本小路の行縢の滝ポケットスペース整備に伴う調査では、中国産陶磁器が出土している。南町の延岡城下町遺跡（第1次）では、間口が狭くて奥が長い典型的な短冊型の町屋遺構の一部や、建物間を流れる水路遺構・水路に伴う階段跡、17世紀後半～19世紀にかけての陶磁器類などが確認されている他、中町通りの整備工事の際には弥生時代後期後半の土器類が確認されるなど、延岡城が位置する川中地区一帯は弥生時代から江戸時代に跨がる一大遺跡群の様相を呈してきている。

参考文献
喜田貞吉『日向国史』下巻　史誌出版社　1930
吉田貞吉『日向国史』古代史　東洋堂　1943
松尾宇一編『日向郷土事典』文華堂　1954
延岡市史編さん委員会編『延岡市史』延岡市役所　1963
石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館　1968
石川恒太郎『南方地区の歴史と遺跡』『史跡南方古墳群保存管理策定書』延岡市教育委員会　1979
石川恒太郎『延岡市史』国書刊行会　1981
宮崎県内務部編『東臼杵郡之部』『宮崎県史蹟調査（復刻版）』西日本図書館コンサルタント協会　1980
延岡市史編さん室編『延岡市史』上巻・下巻　延岡市　1983
永井哲雄「延岡藩（県藩）」『三百藩藩主人名辞典』第4巻　新人物往来社　1994
内藤政恒『内藤政挙伝』内藤政道　1976
内藤政挙公銅像復元委員会編『内藤政挙公銅像復元式典』1985
宮永寿夫編『亮天社の概況と周辺』亮天社出版委員会　1986
本谷俊一編『延陵世鑑（附・延陵旧記）』延岡市立図書館　1988
市山幸作著・秋山榮雄補修『延岡の父　内藤政挙公』内藤政挙公銅像復元委員会　1992

宮崎県立図書館編『内藤充真院道中記』 1994
充真院を学ぶ会編『リーフレット　内藤充真院』 1997
延岡市教育委員会編『延岡城跡保存整備基本計画』 1997
山田　聡「延岡城内遺跡C地点」「延岡城内遺跡B・D地点」『平成4年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第10集　延岡市教育委員会　1993
尾方農一「延岡城内遺跡E地点」『平成5年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第12集　延岡市教育委員会　1994
山田　聡「延岡城第12次（西ノ丸東虎口）」『平成8年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第17集　延岡市教育委員会　1997
尾方農一・高浦　哲「延岡城第11次（本丸長屋跡）」『平成8年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第17集　延岡市教育委員会　1997
尾方農一・高浦　哲「延岡城第14次（牧水広場）」「延岡城第15次（林友寮）」『平成9年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第19集　延岡市教育委員会　1998
山田　聡「延岡城跡」『城郭研究フォーラム・延岡の五城』城山ガイドボランティアの会　2000
山田　聡「延岡城下町遺跡（第1次）」『平成11年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』延岡市文化財調査報告書第22集　延岡市教育委員会　2000
延岡市教育委員会編『現説資料　延岡城内遺跡第4次第1・2区発掘調査結果』 2000
延岡市教育委員会編『現説資料　延岡城内遺跡第5次発掘調査結果』 2001
延岡市教育委員会編『現説資料　延岡城跡第19次（米蔵・武具蔵）発掘調査の結果について』 2001



PL. 3　延岡城下ノ絵図（18世紀後半～19世紀前半）

4．延岡城関係年譜

西暦	和暦	月日	事　　項
1446	文安3	10月	土持宣綱は、松山町に松尾城築城
1496	明応5	8月	土持氏と伊東氏は、東海村夏田付近で合戦し、伊東方は敗北
1496	明応5	9月	再び伊東氏が侵入し、小雨潟（笹目橋付近）で合戦、伊東氏は敗北し門川城を離脱
1535	天文4	12月	門川城主と土持氏が協力し、伊東氏に対抗
1573	天正元	不詳	伊東氏の勢力を背景に、機道和尚が恋島に曹洞宗祐国寺創建
1577	天正5	2月	土持親成が門川城の米良氏を攻め、門川町祇園馬場で合戦し、土持氏は敗北
1577	天正5	不詳	川島町の熊野権現神社が兵火のため焼失
1578	天正6	1月	島津義久は土持親成に石塚百余町を加付し、土持栄続に御手洗村10町を付与
1578	天正6	4月	大友宗麟が豊後から南下し臼杵右衛門等を先鋒として日向入り。無鹿町に軍営を築き、土持氏の松尾城を陥れた。親成の子親信は薩摩に逃れ、高信は妙町で自刃した
1586	天正14	12月	豊前国香春岳城主（福岡県田川市）高橋元種は、九州平定を進めていた豊臣軍の攻撃を受け降伏
1586	天正14	不詳	土持親信は、吾田（県）に戻り旧臣を集め、島津氏と謀り大友氏の打倒を謀った
1587	天正15	4月	島津義久は豊臣秀長に降伏し、九州平定がほぼ終了
1587	天正15	5月	豊臣秀吉は日向の諸侯を封じ、高橋元種は県を拝命
1591	天正19	4月	高橋元種は三田井親武（高千穂町）が反抗したため、宮水（高千穂町）で滅ぼした
1591	天正19	不詳	川島町の熊野権現神社を再興
1598	慶長3	11月	高橋元種は三田井氏の遺臣を討ち、領内を平定
1600	慶長5	10月	徳川家康は伊東祐兵に命じ、相良、秋月、高橋の諸氏を通じて島津氏を伐たせた
1600	慶長5	10月	高橋元種は関ヶ原の戦に出陣し、西軍方として岐阜大垣城の防衛に当たったが、東軍方に転じ本領安堵
1600	慶長5	10月	伊東祐兵が宮崎城を攻め、城主権藤種盛父子は戦死
1600	慶長5	10月	高橋元種は、53000石で入封し松尾城に入った。県城？、門川城（門川町）、潮見城・日知屋城（日向市）、宮崎城（宮崎市）を領した
1601	慶長6	不詳	高橋元種は県城（延岡城）の築城に着手。城内にあった愛宕社を恒富町に移動した。県城の規模、東西百三十間、南北八十間、六千六百七十六坪、京口門、日向口門、野田口門、川原口門、肥後口門、豊後口門
1603	慶長8	秋頃	高橋元種は松尾城から県城に移った。北町、中町、南町の城下町、本小路、北小路、桜小路の武家屋敷を整備
1605	慶長10	2月	高橋元種は岡富八幡宮を再興
1605	慶長10	9月	高橋元種は行縢山の熊野大明神（行縢神社）に鰐口寄進
1607	慶長12	10月	今山八幡宮で神事能始まった
1611	慶長16	4月	南町に称揚山妙専寺（浄土真宗）を創建
1613	慶長18	10月	高橋元種は、罪人隠匿の罪に問われ、領地を没収され陸奥国棚倉藩（福島県棚倉町）立花宗茂に預けられた
1614	慶長19	11月	有馬直純が大坂冬の陣に出陣した
1614	慶長19	7月	肥前国日之江城（長崎県北有馬町）の有馬直純が53000石で県（延岡）に入封
1614	慶長19	不詳	肥前国有馬山観三寺を大貫町に移して二岸山白道寺と称した
1615	元和元	不詳	有馬直純は川北地区に元町、紺屋町、博労町を整備
1638	寛永15	1月	島原の乱起こり、藩主直純は江戸から、子康純は県から出陣
1646	正保3	9月	有馬康純が岡富天満宮（亀井神社・天神小路）を創建
1651	慶安4	不詳	御本丸の修築願を提出
1652	承応元	3月	石垣普請開始
1653	承応2	5月	有馬康純が小林山光勝寺に梵鐘寄進
1655	明暦元	6月	城の修復が完成し、二階櫓、三階櫓等が完成
1655	明暦元	不詳	柳沢町整備され、所謂延岡七町完成
1656	明暦2	6月	有馬康純が蓬莱山八幡宮（今山八幡宮）に梵鐘を寄進。梵鐘には「日州延岡城主有馬左衛門佐　従五位藤原朝臣康純」とあり延岡の地名が記された最古の資料
1661	寛文元	9月	日向地震が起き、宮崎郡、那珂郡方面被害甚大
1667	寛文7	不詳	板田橋完成。長さ六十九間三尺、幅二間。南町今井又四郎が渡り初め
1681	天和元	4月	延岡大雨にて御本丸東方坂石垣少々崩落
1683	天和3	2月	本小路から出火し城内に延焼、武家屋敷21軒、塀32間半、三階櫓等焼失、石垣崩落（天和2年説もあり）
1683	天和3	3月	大雨により、西ノ丸御長屋塀崩れ、長屋下石垣長さ11間、高さ4間共に崩落（天和2年説もあり）

第1表　延岡城関係年譜1

1686	貞享3	不詳	延岡城巽方塀土台下石垣1カ所、三の丸北の方石垣一カ所崩候に付、修補願いを提出
1689	元禄2	7月	洪水により板田橋流失
1690	元禄3	9月	山陰村(東臼杵郡東郷町山陰)で百姓逃散事件起きた
1691	元禄4	12月	有馬永純が無城の地越後国糸魚川(新潟県糸魚川市)に50000石で移封
1692	元禄5	2月	下野国壬生城(栃木県壬生町)の三浦明敬が3000石を加増され、延岡藩初の譜代大名として23000石で入封
1694	元禄7	不詳	大貫町の三福寺を現在地(北町)に移動
1700	元禄13	9月	岡藩(大分県竹田)との梓山境界紛争は、延岡藩の勝訴(尾根境界説)で終了
1707	宝永4	10月4日	宝永地震　本丸櫓瓦所々落申候、同塀瓦所々落申候、帯郭門棟瓦落申候、同所石垣一カ所崩申候、同所一カ所震出申候、同所塀所々落申候、同所多門之前長八間余幅三寸ほど地割申候、其外城中所々地割申候、城下町屋十二軒半潰、内一軒潰申候、同所土蔵二十五軒大破、内一軒潰申候、津波被害有、　坂下御門脇石垣破損、同所塀下石垣同前、其外所々御家中鋪屋共に破損、　三ノ曲輪橋脇石垣五間崩落
1712	正徳2	7月	三浦明敬が三河国苅谷(愛知県刈谷市)に移封した
1712	正徳2	7月	三河国吉田(愛知県豊橋市)の牧野成央が延岡藩最大の80000石で入封。飛地として豊後国の大分郡、国東郡、速見郡及び日向国の宮崎郡を領した
1724	享保9	不詳	出北村(出北・別府地区)の灌漑のため、家老藤江監物が郡奉行の江尻喜多右衛門に命じて岩熊井堰及び用水路の工事を着手させた
1731	享保16	8月	藤江監物は軍用金流用の嫌疑により幽閉され、七折村舟の尾(日之影町)の獄中にて死去
1734	享保19	不詳	岩熊井堰及び用水路が完成し、田畑122町1反5畝23歩増加
1747	延享4	4月	牧野貞通が常陸国笠間(茨城県笠間市)へ、笠間の井上氏は陸奥国磐城平(福島県いわき市)へ、磐城平の内藤政樹は延岡藩(70000石)へ移封する三方所替えが行われた
1750	寛延3	8月	石垣築直堀浚願いを提出
1768	明和5	2月	内藤政陽が城内本小路に学寮、武寮を創設した。山本与兵衛を監督、白瀬道順を講師、佐久間左膳を儒学執行に任じた
1769	明和6	7～8月	地震及び大雨によって石垣、土塀など多数破損。　御本城内　長坂御門屋根崩落、同所高石垣南之方角石折廻二間高サ二間半崩、御太鼓矢倉登坂左右石垣北ノ方高八尺ニ三間南之方角折廻九尺ニ三間崩、同所南之方御土蔵上通石垣高サ二間ニ五間崩、同所北ノ方石垣弐カ所高サ一間ニ四間半崩土手五間ニ七間程崩、二階御櫓石垣もめ申候、塀屋根瓦壁等大方損申候、　西御丸内、向御番所取附塀十二間崩但六尺船間ニメ、同所塀下石垣三間半崩、同所南表塀十八間五尺崩、同所裏御門御番所下上手五間崩但古崩れ共、同所御門取附塀西之方九間半潰、同所新御殿東通中之口迄塀十七間崩、同所本メ方役所縁下石垣二間程崩、同所唐之間北之方石垣二間余崩、同所東表塀武者御門迄十九間一尺半潰、同所塀下石垣十九間半高サ四間ノ内二間半ニ二間崩残之分孕出、同所向御番所下石垣押出、同所坂下御門外腰懸ケ下石垣六間半崩腰掛ケ共破損、同所御門北之方塀折廻三間半崩、御馬屋向丸山土手石垣二カ所メ十三間崩、同所土手十一間崩、往来御長屋二カ所石垣九間ニ二間崩、同所御貸長屋石垣十四間崩、下御殿馬場入口大路次崩左右取付塀七間程半潰
1770	明和7	2月	石垣修理願いを提出
1793	寛政5	11月	大火があり、博労町、元町、紺屋町の104軒焼失
1810	文化7	4月	伊能忠敬が測量のため延岡に来訪
1812	文化9	6月	伊能忠敬が測量のため延岡に来訪
1815	文化12	1月	江戸藩邸に学問所として崇徳館を創立
1850	嘉永3	5月	学問所を広業館に改称
1852	嘉永5	10月	石垣修理願いを提出
1854	安政元	11月5日	豊後水道震源の地震発生。西曲輪石垣崩落し切通し通行不能。　御本城内　御三階櫓台土塀屋根瓦八間落、石御門倒れ、長坂御門棟瓦一間落、南御櫓石垣少々抜出、御渡櫓北之方壁少々損、　西御丸内　切通上上手石垣共高三間横四間崩、内土手二間石垣一間、中御門曲リ左右石垣崩、向番所大破、同断石垣南之方高四間横九間孕出、唐之間北之方石垣横十二間高四間孕出、坂下張番所御門外塀六間瓦損、同所北之方塀六間瓦損、向番所北之方塀六間大破、同所南ヨリ西江折廻御台所上等中御門迄塀二十五間大破、御徒番所曲リ、御玄関南土蔵壁大破、唐之間ヨリ御広間前迄十四間地割レ、下　御殿御土蔵壁大破、　御用所内　御土蔵三カ所共屋根并壁損其外所々損、　大部屋内　石垣北ヨリ西江折廻二十二間崩、塀四間倒レ二百間伏掛リ、本小路長屋西之方塀二間倒レ、同所北之方塀一間半伏掛リ、広業館塀二間伏掛リ、　三福寺内　尚徳院様　御墓損、孝献院様　右同断、転生院様　右同断、晴雲院様　右同断、玉垣不残損、のし立二間程倒レ、孝徳院様御門伏掛リ、石御燈籠不残倒

第2表　延岡城関係年譜2

1857	安政４	４月	南町に医学所明道館を開設
1864	元治元	８月	第１次長州征討出兵
1866	慶応２	６月	第２次長州征討出兵
1868	明治元	１月	延岡藩兵は、幕命により京都郊外野田口の防衛を担当
1868	明治元	４月	内藤政挙は朝廷より謹慎を命ぜられた
1868	明治元	５月	内藤政挙は謹慎を解かれた
1868	明治元	８月	内藤政挙が延岡に戻った
1869	明治２	２月	豊後国内の延岡領と日向国内20700石余りと日田県管轄36000石余りの交換を実施
1869	明治２	６月	版籍奉還により内藤政挙は延岡藩知事に任命
1869	明治２	７月	廃藩置県により延岡県が置かれ、内藤政挙は藩知事を免職され、東京府貴属となり９月に上京
1870	明治３	９月	中町照源寺を廃して妙専寺に、中町誓敬寺を廃して南町小林山光勝寺に合寺した。また、中町本誓寺を廃して二福寺に合寺
1871	明治４	11月	延岡県が廃止され美々津県設置
1871	明治４	６月	延岡藩史に「藩城ヲ廃シ薬園トナス」の記録あり
1872	明治５	11月	広業館廃止
1873	明治６	１月	美々津県が廃止され宮崎県設置
1873	明治６	１月	延岡社学（現岡富中学校敷地）設立
1875	明治８	１月	延岡社学は尭天社に改称
1876	明治９	４月	小林乾一郎の提唱により尭天社の一部に女児教舎設立
1876	明治９	８月	宮崎県は鹿児島県に併合
1877	明治10	２月	西南戦争が起こり延岡隊は薩摩軍に参加
1877	明治10	８月	西南戦争に伴う「和田越の決戦」があり延岡は陥落、延岡城の大鼓櫓焼失
1878	明治11	２月	女児教舎は岡松甕谷邸跡地（現カルチャープラザのべおかの一部）に移転
1878	明治11	不詳	城山公園太鼓櫓跡に今山八幡宮より梵鐘を移設
1882	明治15	１月	川中地区で大火があり、南町、舘倉町、中町、北町の474戸が焼失
1883	明治16	５月	宮崎県再配属
1883	明治16	９月	洪水が起き、板田橋流失
1886	明治19	９月	洪水が起き、大瀬橋などが流失
1887	明治20	８月	洪水が起き、桜橋、専念寺橋、南町橋、新町橋などは流失し、大瀬橋は大破
1890	明治23	７月	板田橋、大瀬橋の改修
1890	明治23	７月31日	内藤政挙は東京より戻り、旧図書館付近（内藤松蔵宅・内藤政養末子で内藤の下御殿？とも呼ばれた）に居住
1890	明治23	不詳	尭天社・女児教舎は内藤家に経営移管
1892	明治25	２月	内藤政挙は、西ノ丸に建設された御殿に引越
1893	明治26	４月	旧延岡営林署跡に、前身の鹿児島大林区署延岡小林区署を開設
1901	明治34	４月	女児教舎を廃止し、私立延岡女学校開校
1903	明治36	４月	尭天社を廃止し、跡地に私立延岡女学校移転
1906	明治39	４月	私立延岡女学校は私立延岡高等女学校に改称
1915	大正４	２月	私立延岡高等女学校（現岡富中学校敷地）のカラミレンガ塀が造られた
1920	大正９	不詳	誓敬寺が新小路に移転
1924	大正13	８月	大雨により大瀬橋流失
1925	大正14	６月	内藤家の投資により鉄橋の亀井橋開通
1928	昭和３	12月頃	須崎地区の埋め立て完成後、延岡架橋組合によって「鉄橋（須崎橋）、二銭橋（五ヶ瀬橋）の有料橋を架けた
1929	昭和４	４月	私立延岡高等女学校は県立延岡高等女学校として移管
1934	昭和９	３月	無料の須崎橋・板田橋開通
1934	昭和９	４月	内藤家より城山公園の寄贈
1935	昭和10	11月	現板田橋開通
1935	昭和10	９月頃	昭和天皇の行幸に備え、城山公園整備実施
1937	昭和12	７月	現安賀多橋開通
1938	昭和13	３月	県立延岡高等女学校寄宿舎建設のため、現水道局用地を取得
1939	昭和14	10月	大雨により大瀬橋流失、須崎橋半壊
1939	昭和14	８月	内藤家より西ノ丸の寄贈を受け、内藤記念館として公開
1940	昭和15	８月	県立延岡高等女学校の寄宿舎完成
1942	昭和17	３月	内藤家より城山公園北側を青年学校用地として寄贈
1943	昭和18	９月	洪水のため須崎橋被害

第３表　延岡城関係年譜３

1945	昭和20	6月29日	延岡大空襲により大瀬橋・五ヶ瀬橋を含む市街地の多くが罹災し、現水道局にあった寄宿舎も焼失。延岡城関連では西ノ丸の御殿・亀井神社が焼失
1945	昭和20	不詳	須崎橋・亀井橋の鉄骨は軍用に供出された
1946	昭和21	3月	西ノ丸旧内藤記念館跡にNHKが中継放送所を開設
1947	昭和22	4月	延岡小学校がカルチャープラザのべおか付近に開校
1947	昭和22	4月	罹災した県立延岡高等女学校の寄宿舎及び校舎の復旧工事完成
1948	昭和23	4月	学制改革により県立延岡高等女学校を廃し、県立岡富高等学校設置
1948	昭和23	6月	大瀬橋(木橋)完成
1949	昭和24	4月	県立高等学校の通学区域制実施に伴い、県立岡富高等学校を廃し、県立延岡恒富高等学校に統合。施設等は延岡市立岡富中学校に引き継がれた
1950	昭和25	1月	旧五ヶ瀬橋開通
1950	昭和25	4月	延岡税務署が現延岡市健康管理センターへ移転・新築
1950	昭和25	5月	キジア台風により大瀬橋流失
1951	昭和26	7月	城山公園に児童遊園地整備
1953	昭和28	4月	この頃、現水道局敷地に市上下水道建設事務所(後の水道課)が設置された
1953	昭和28	4月	旧須崎橋開通
1953	昭和28	5月	旧大瀬橋開通
1955	昭和30	8月	市制20周年記念事業として、(株)旭化成より野口記念館寄贈
1961	昭和36	4月	西ノ丸の一角に延岡測候所開設
1962	昭和37	3月	NHK中継放送所が出北町へ移転
1963	昭和38	2月	城山公園の時報鐘を新鋳、初代の梵鐘は内藤記念館に移転することとなった
1963	昭和38	3月	現亀井橋開通
1963	昭和38	10月	市制施行30周年記念事業として、西ノ丸のNHK中継放送所跡に市民会館内藤記念館建設
1964	昭和39	11月	市制30周年記念事業として、(株)旭化成より旧市立図書館の寄贈を受け、翌年1月開館
1965	昭和40	7月	現須崎橋開通
1970	昭和45	4月	現水道局集中管理棟完成
1974	昭和49	4月	延岡小学校がカルチャープラザのべおか付近から現在地に移転
1977	昭和52	10月	延岡市社会教育センター完成
1980	昭和55	3月	現水道局本館完成
1983	昭和58	12月	現水道局集中管理棟西棟増築
1988	昭和63	4月	都市景観形成モデル事業にかかる城山公園整備スタート
1993	平成5	3月	城山公園に北大手門(枡形門)整備
1993	平成5	3月	現五ヶ瀬橋開通
1997	平成9	2月	カルチャープラザのべおか(現市立図書館)開館
1997	平成9	3月	延岡城跡保存整備基本計画策定
1997	平成9	4月	本小路通線改良事業スタート
1998	平成10	3月	延岡城跡を市史跡に指定
2000	平成12	3月	延岡測候所無人計測化
2001	平成13	3月	延岡測候所建屋撤去及び自動観測機器設置
2001	平成13	3月	現水道局集中管理棟撤去
2001	平成13	7月	宮崎北部森林管理署延岡事務所(旧延岡営林署)閉鎖
2002	平成14	3月	大瀬橋架け替えのため仮橋開通
2003	平成15	3月	旧大瀬橋撤去

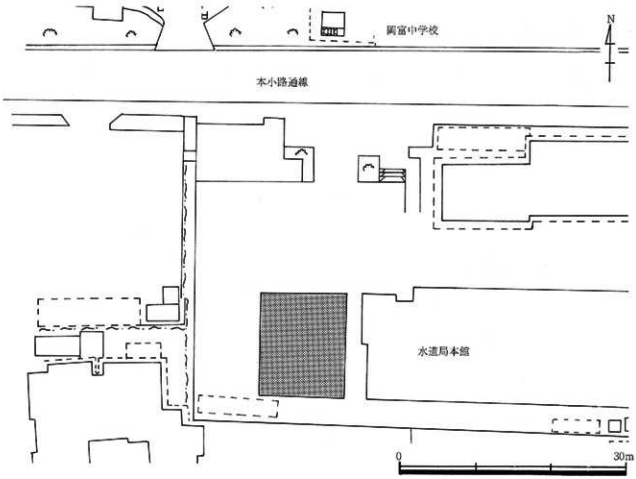
第4表　延岡城関係年譜4

第２章　調査の成果

１．調査方法と基本土層

調査箇所は、水道局の駐車場として利用されているため、日常業務に支障を来さないよう配慮する必要があった。そのため、調査区からの廃棄土はベルトコンベアーを活用して仮置き場所を必要最小限度確保することとし、随時外部に搬出する方法を採用した。層序確認は、調査区東壁断面を利用した。調査は、先ず重機によってアスファルトの撤去・搬出を行い、続いて近世の遺構面まで削平後に土層断面確認と並行しながら手作業による掘り下げ調査を行うこととした。調査区は、面積が狭いため現場に設定せず、報告書段階において2.5mメッシュでグリットを配置し、東西列をＡ～Ｄグリット、南北列を１～５グリットとして設定し、周辺部は隣接するグリットに統合した。遺構番号は種類別に確認された順に付していった。また、周辺の調査から弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構・遺物が検出されていることから、深堀トレンチにより遺物包含層の有無を確認することとした。

本調査地は、アスファルト舗装されており、標高約５ｍを測る。アスファルト及びクラッシャーラン基盤層は約0.3～0.4ｍに渡って敷き詰められ、調査区北側にある本小路通線とは、五ヶ瀬川の洪水対策等から約1.5ｍほど高くなっていた。この段差は、戦後利用されていた旧木造建物の資料には見当たらないことから、現代の盛土と予想された。これを裏付けるように、表面のアスファルト及びクラッシャーラン基盤層（約0.3m）、直下にはカクラン及び焼土が混入する茶褐色粘質土が約0.6mの層厚で広がっていた。同層下は、茶褐色粘質土で延岡城の基盤層である砂岩及び頁岩の風化粒子を含



第２図　調査区位置図（１／500）

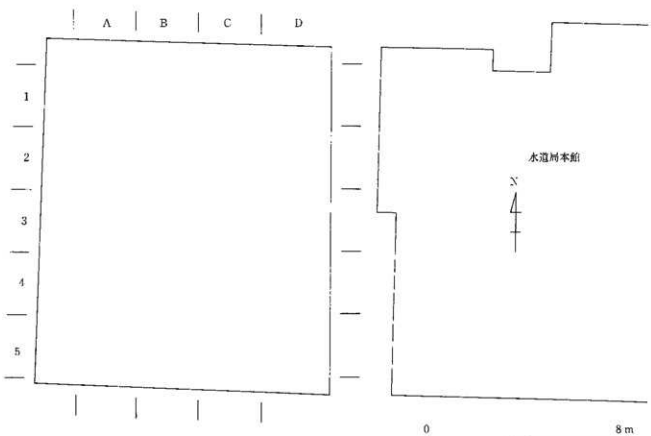
み、層厚が約１ｍに達する安定した土層で、硬化面は確認されないがピット等が検出されたため遺構面として設定した。その下層には、茶褐色砂質土及び明茶褐色粘質土が層厚約２ｍ以上の堆積を確認した。

２．調査の概要

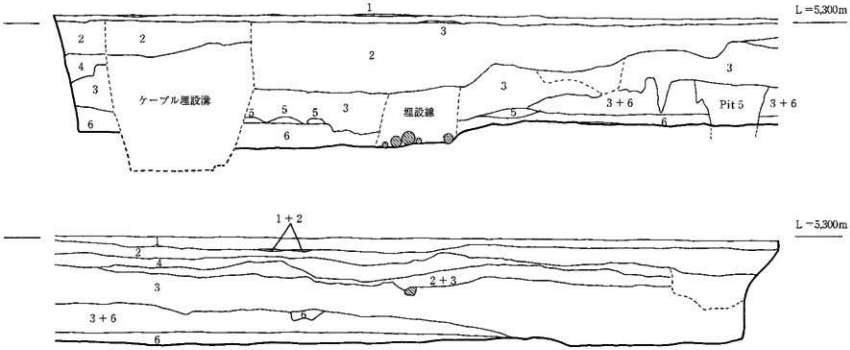
発掘調査は、市水道局電気室移転先と高圧地下ケーブル（以下、ケーブルという）の移転埋設箇所が対象となったが、現水道局の進入路及び駐車場にあたり日常業務への支障を来す恐れがあることから、建物予定地の調査を優先し、ケーブル移設予定地は工事立会にすることとした。

まず、ケーブル確認のため重機による地表面のアスファルト除去後、ケーブル埋設溝の掘削ラインを確認しながら慎重に掘り下げを実施した。その結果、旧建物のコンクリート・レンガ・石炭ガラ（昭和初期～30年代に旭化成の石炭火力発電所から排出された石炭の燃焼屑）などを含むカクラン層直下からケーブル５本を検出した。さらに、同層直下の地表下約0.9～1.0m付近から近現代のカクランを受けていない茶褐色粘質土が確認されたことから、この面を遺構検出面として設定した。ケーブルは、調査区の東面中央やや北側から西向きに入り、中央部付近で北面に向かって直角に折れ曲がって逆Ｌ字状に検出された。このため、重機によるこれ以上の掘削は不可能となり、以後は全て手作業による掘削及びベルトコンベアーによる掘削土の搬出を実施することとした。

調査の結果、最初に調査区中央を南北に縦断する溝状遺構１が検出され、中央部から調査区北面にかけて石垣遺構が確認された。溝状遺構１は、底部に５～15cmの河原石が敷き詰められて暗渠状を呈



第３図　グリッド配置図（１／160）



1 アスファルト
2 クラッシャーラン
砕石
3 茶褐色粘質土
焼土粒（0.1～1.0㎝）・炭化物多く混じる
造成盛土
4 カクラン
旧建物の火災に伴う焼瓦廃棄穴
5 明茶褐色粘質土
粘性高く、地山岩の風化粘土
6 茶褐色粘質土
岩干炭化物混じり、少量の白色岩粒含む

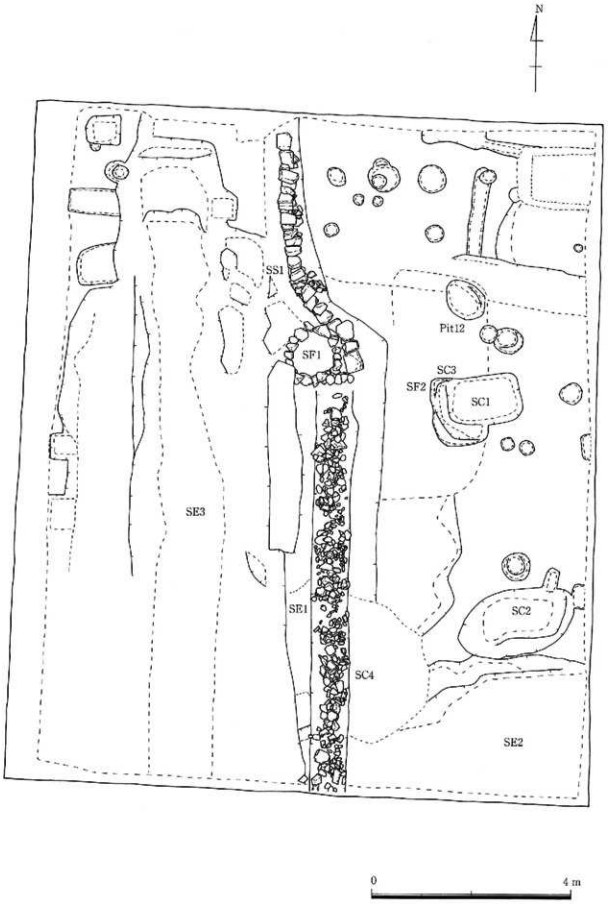
0 2m

第4図 調査区東壁南北土層断面図（1／40）

し、その上部に瓦類が散在していた。周辺から17世紀後半～18世紀前半の「大明成化年製」「大明年製」等の銘款が入った肥前陶磁器類や瓦類が出土した。石垣遺構１は中央部付近で逆Ｊ字状に確認され、前面を確認するため掘り下げたところ、新たに西側から南北方向の大溝遺構が検出されたことから、この遺構に対する土留めの石垣として築かれていたことが判明した。また、逆Ｊ字状の石垣の窪み部分（西側）から井戸遺構１が確認され、井戸を迂回するためにこの形状に造られていたことが判った。井戸内からは、17世紀前半の肥前陶磁器が出土した。さらに、井戸遺構１付近から大溝遺構方向に斜め方向に階段状の段差が確認された。調査区南東側から溝状遺構２が検出され、埋土の栗石中から17～19世紀代の肥前、関西系、瀬戸美濃などの陶磁器類をはじめ、中国磁器、在地の丸山焼（蓬莱産焼・延岡市）、庵川焼（門川町）や箱庭道具などが検出された。土壙は４基検出された。土壙１・３は切り合って検出され、18～19世紀の植木鉢などが出土した。土壙２は単独で検出され、18世紀後半～19世紀代の陶磁器類（肥前、関西系、瀬戸美濃）、焼塩壺、碁石、寛永通宝、瓦玉などが出土した。土壙４からは17世紀代の肥前陶磁器、中国磁器、土師小皿等が一括資料として確認された。井戸遺構２は、井戸遺構１・石垣遺構１・土壙３・ピット12と切り合って検出された。遺構検出段階及び一括資料として、肥前陶磁器類が出土した他、中国磁器。九州陶器などが検出された。この他、調査区中央より東側において、時期は不明だが掘立柱建物跡の存在が伺えるやや大型のピット群が確認された。

ケーブル移設に伴う立会調査では、掘削レベルが近現代の盛土を中心としたもので、道路側のみ遺構検出面レベルより下位の掘削となったが、カクラン等により遺構、遺物は殆ど検出されなかった。

PL.４　遺構検出状況（東から）



第５図　検出遺構分布図（１／80）

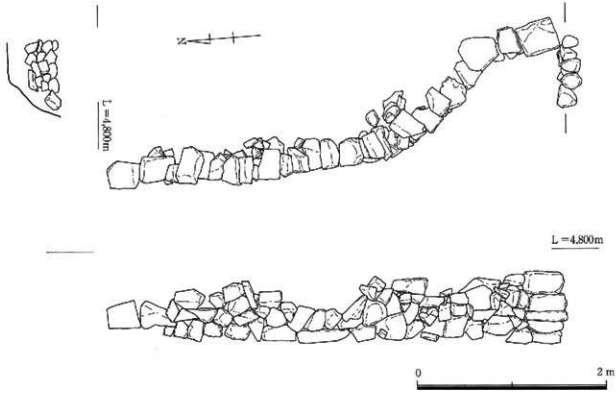
3．検出遺構と遺物

（1）石垣遺構

遺構面検出段階において最初に確認されたもので、B－1区～C－2区にかけて検出された。遺構の上部は、ケーブルによって一部破損を受けていた。本遺構は、南側を逆丁字状に湾曲した形状を呈し、高さ約0.8m、長さ4.9m以上を測る。石材は人頭大程度の阿蘇溶結凝灰岩、花崗斑岩の角礫や転礫を主に利用し、3～5段に小口積みによって積み上げられていた。南側の隅石は、算木積技法は見受けられないが長方形の石材を5段に積み上げられているのが確認された。全体的には雑な積み上げが行われ、裏込めの栗石は殆ど検出されなかった。出土遺物は、石垣遺構前面が大溝遺構の埋土と同一土層のため大溝遺構の出土遺物として報告している。

（2）井戸遺構1

石垣遺構の前面掘り下げ中にB－2区から検出された。内径約0.9m、深さ約1.5m以上を測り、約20～40cmの阿蘇溶結凝灰岩製や花崗斑岩製の角礫を中心に組み上げられ、各々の間に拳大程度の河原石を詰め込まれた構造になっている。埋土は若干砂質土を含んだ暗青灰色粘質土で覆われており、水が貯まっていたことが伺える。内面は、石垣遺構など上部構造物の影響なのか北側に孕みが確認されたため深堀調査が出来ず下部構造は不明であった。廃棄理由は、石組みの孕みによって石垣遺構等の上部施設保護のため井戸が廃棄された、若しくは内部堆積物が砂質土を帯びた均一な土壌であること



第6図　石垣遺構実測図（1／40）

から、洪水等により一気に埋没した可能性も考えられる。廃棄時期は、埋土中の出土遺物が少ないため断定は出来ないが、17世紀前半～中頃と推定される。

出土遺物

119（PL.34）は、中国製の白磁碗である。120（PL.34）は、磁器の肥前染付火入である。畳付け・高台内面は無釉である。121（PL.34）は、肥前陶器皿で外面無釉となる。内面・畳付けには胎土目積み痕を有する。

（3）井戸遺構2

遺構検出面段階で一部が確認され、土壙1・3及び井戸遺構1を一部撤去後にほぼ全容を確認した。B－2・3区～C－2・3区にかけて検出された。直径約4.4m、深さ21mを測り、8層（茶褐色砂質土）から直径1.0m、深さ0.4mのやや柱状に掘り込まれた7層（暗黒褐色土）を確認し、多くの木材片が検出された。その直下には固い茶褐色岩質土が確認されたことから、7層を最下層として井戸木枠の存在が推定される。また、直上の5層（灰白色粘質土）は、木片・腐植土が多く含まれていることから、7層の埋没後、水が滞留した時期の底土であったことが推定され、その時期は出土遺物から17世紀中頃と推定される。この他、本遺構枠内の北端部よりピット12が検出され、土師器皿が出土した。

出土遺物

1は、肥前磁器の小鉢である。外面に褐釉を施し、底部は露胎となっている。2は、土師器小皿である。口縁端部にススが付着している。111は、軒平瓦である。122（PL.34）は、陶器碗である。福岡若しくは肥前産とみられ、内面は鉄釉、外面は藁灰釉が施されている。123（PL.34）は、中国・景徳鎮窯産の染付皿で、芙蓉手文が施されている。124（PL.34）は、肥前陶器の皿である。内外面に胎土目積み痕が残る。125～128（PL.34）は肥前磁器である。125は染付大皿である。

PL.5　石垣遺構検出状況1（西より）

PL.6　石垣遺構検出状況2（南西より）

PL.7　石垣遺構全景（西より）

126は、染付瓶である。127は、青磁天目坏台である。青磁釉をたっぷりかけることによって、坏と台部を結合させている。128は、火入である。外面に笹文が施されている。

(4) 土壙1

D－2・3区から検出された。規模は約1.5m×1.0mの隅丸長方形を呈し、長軸線は東西方向となっている。深さは約0.5mを測る。西側及び南西側は土壙3と切り合いが確認されたが、土層断面観察において両遺構とも同じ土壌のため分類が困難なことから一括資料として遺物を取り上げた。南西部からは、瀬戸美濃産の植木鉢が検出された。

出土遺物

4は、肥前陶器の碗である。内外面に白土の刷毛目を施す。13は、陶器の植木鉢である。福岡又は中国（清朝）の所産と推定され、内面口縁部及び外面に黒褐色釉を施している。102・103は軒丸瓦である。102は、連珠三巴文右巻16珠で圏線を有し、巴尾部は圏線に接していない。103は連珠三巴文左巻14珠？とみられ、延岡城での出土例が少ない資料となっている。圏線を有し、巴尾部は圏線に接していない。109は、鯱瓦の鱗部分と推定される。鱗は、篦状工具により線彫りで表現されている。鯱瓦の出土例は、延岡城長坂御門跡周辺の調査で検出されている。

(5) 土壙3

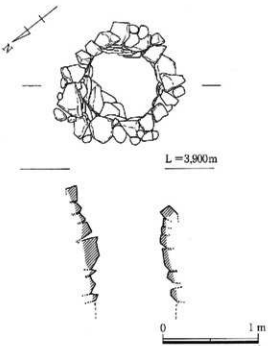
C－2・3区から検出された。推定規模は約1.3m×1.0mの隅丸長方形を呈し、長軸線は南北方向にあたる。深さ約0.2mを測り、土壙3に比較して約半分の深さになっている。また、遺構の南西部及び北西部にはテラスが1段確認されている。

出土遺物

殆ど検出されていない。

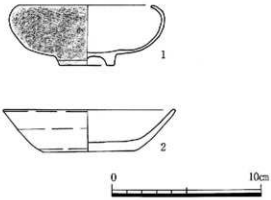
PL.8　井戸遺構1　検出状況（北から）

PL.9　井戸遺構1　全景（南から）



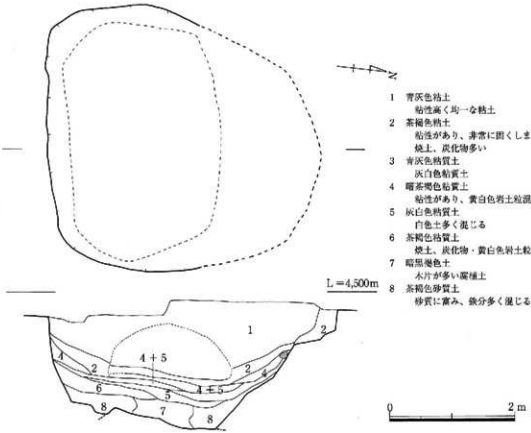
第7図　井戸遺構1　実測図（1／40）

PL.10　井戸遺構２　検出状況（東から）

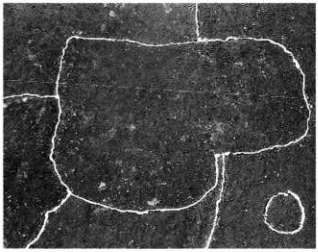


第９図　井戸遺構２　出土遺物実測図（１／３）

PL.11　井戸遺構２　出土遺物

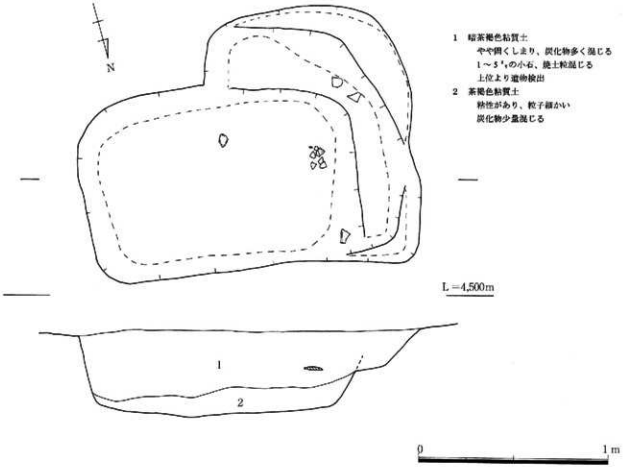


第８図　井戸遺構２　実測図（１／60）



PL.12　土壙1・3　検出状況

PL.13　土壙1・3　完掘後



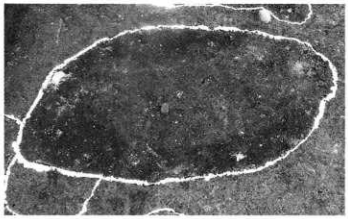
第10図　土壙1・3　遺構実測図（1／20）

(6) 土壙2

遺構面検出段階においてD－4区から検出された。規模は約2.3m×1.3m、深さ約0.7mを測り不定形な楕円形を呈する。遺構のすぐ南側には溝状遺構2が隣接し、溝の長軸線は土壙2と一致している。北東部からはテラスが1段確認された。埋土はいづれも炭化物、焼土粒を多く含み、2層、3層の暗茶褐色粘質土からは陶磁器類、瓦類が多く検出された。遺物の出土状況は遺構の北東側より斜め方向に堆積しているのが観察され、北側に推定される屋敷から廃棄されたものと推定される。

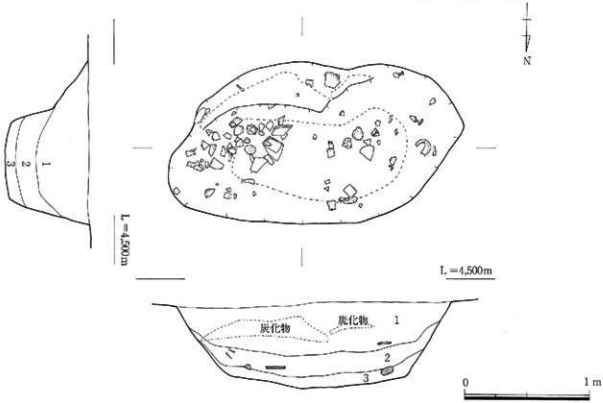
出土遺物

3は、肥前磁器の染付碗である。外面に丸文・見込みに崩れた五弁花コンニャク印及び二重圏線がみられ、釉剥ぎとなっている。5は、関西系染付碗である。見込みに「寿」、外面には漢詩の赤壁に関するものが描かれている。6は、瀬戸美濃磁器の染付碗である。端部が外反する端反碗で、透明釉が多くかけ

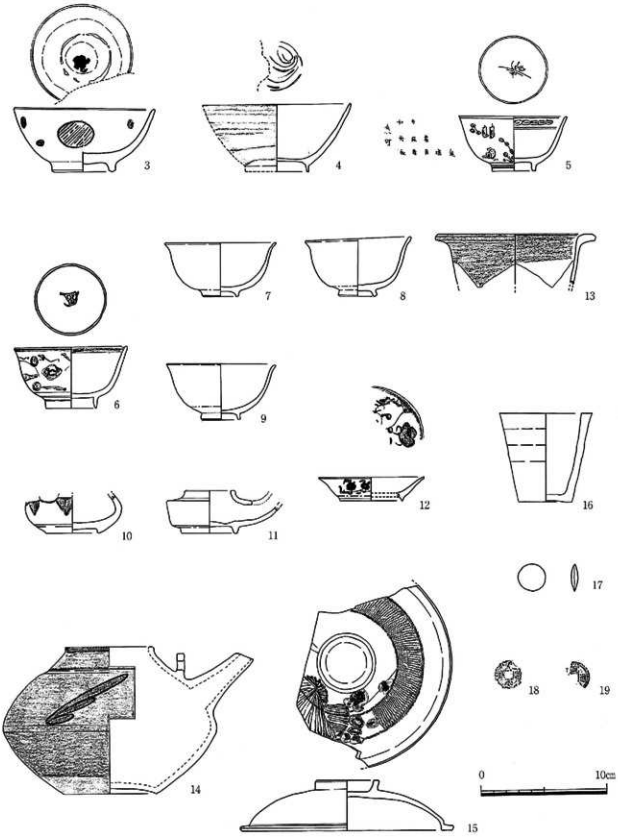


PL.14　土壙2　検出状況

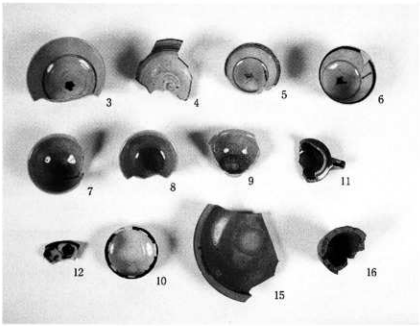
PL.15　土壙2　遺物出土状況

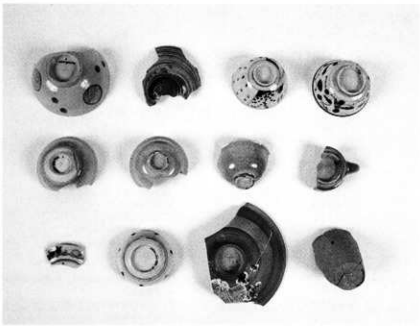


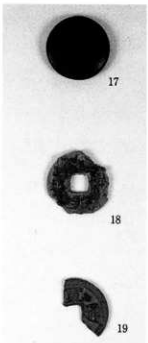
第11図　土壙2　遺構実測図（1／30）



第12図　土壙1・2・3　出土遺物実測図（1／3）





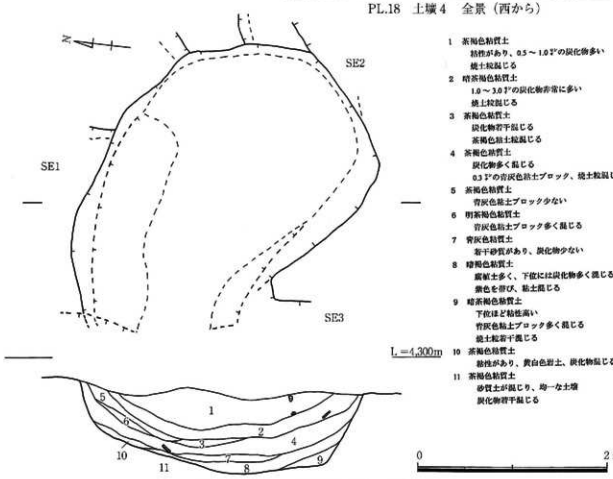


PL.16　土壙1・2・3　出土遺物

られている。7～9は、磁器碗である。19世紀代の延岡・丸山焼（蓬莱産焼）と考えられている。端反碗で内外面に貫入が多くみられ、底部は露胎となる。延岡城関係において内堀跡などで数多く出土している。10は、肥前磁器の香炉である。上半分を欠損しているが、丸穴状の透穴の一部が残存している。11は、関西系磁器の灯火具である。灯心を支える部分が注口状に延び、内外面に貫入がみられる。12は、瀬戸美濃磁器の染付皿である。14は、関西系陶器の算盤型土瓶である。底部には、三足状？の突起が付着している。15は、関西系陶器の雪平鍋釜である。16は、焼塩壺である。側面は直線上に立ち上がり、刻印はみられない。17は、黒葬石である。18・19は寛永通宝である。110は軒丸瓦である。瓦当に唐草模様が施されている。105・108・113は、平瓦である。105は、内面の端部は面取り成形が施され、側面に「大吉」の刻印がみられ

PL.17　土壙4　土層堆積状況（西から）

PL.18　土壙4　全景（西から）



第13図　土壙4　遺構実測図（1／40）

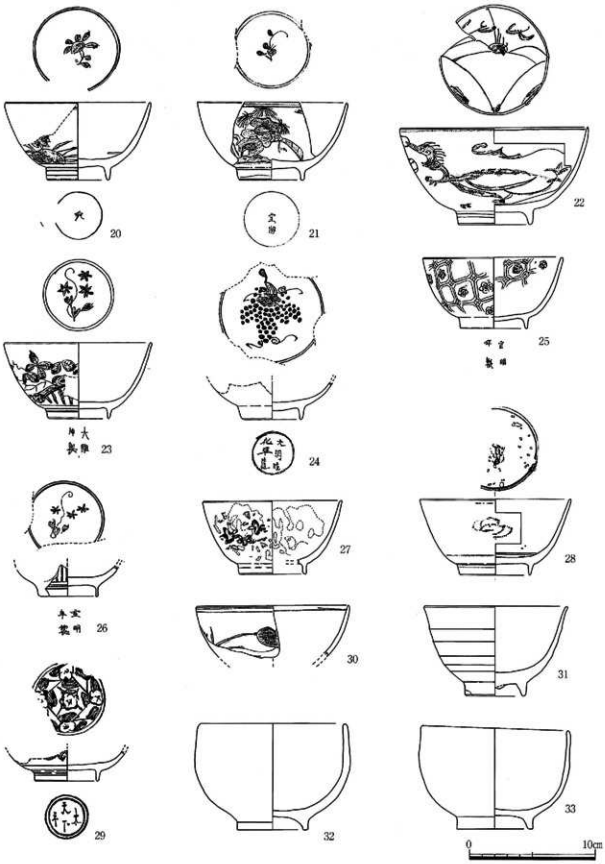
る。108は、側面に「吉岡新右衛門」の刻印がみられる。吉岡新右衛門銘の瓦は、千光寺山門の丸瓦（製作年不詳・吉岡新右衛門）、延岡城下町遺跡第１次の平瓦（製作年不詳・吉岡新右衛門）蓬莱山普龍寺跡の菊文鬼瓦（源＜元＞治元年（1864）・甲子三月中向・當城下御用瓦師・頭取・吉岡久治兵衛房常七拾歳作之　吉岡新右衛門）においても確認されている。113は、側面に違い釘抜き紋の刻印がみられる。129（PL.35）は、染付皿である。蛇ノ目釉剥ぎ高台を有し、高台内面に銘款がみられる。

（7）土壙４

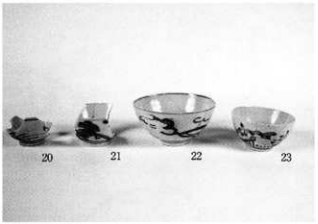
Ｂ・Ｃ－４・５区から検出されたもので、西側に隣接する大溝遺構壁面検出段階において確認された。したがって、大溝遺構との切り合いラインは明確に確認されなかった。また、出土遺物の一部は大溝遺構として取り上げた遺物との接合資料として取り上げている。規模は、約3.6m×約1.3mの楕円形状を呈し、深さは約0.8mを測る。本遺構は南南東－北北西を主軸とし、西側は大溝遺構と切り合っている。底面は北側にテラス状の面があり、１段下がって南側に平坦面が形成されている。土層観察によると、２層（暗茶褐色粘質土）及び床面付近の８層（暗褐色粘質土）からは大量の炭化物、焼土粒が確認されている。また、８層中に礫積土が多く混入していることから、一定期間本遺構が存在していたことが伺える。遺物は、17世紀前半～後半の肥前陶磁器を中心に、中国磁器景徳鎮窯、土師器小皿、焼塩壺など出土し、本調査における単一遺構の一括資料が得られた。

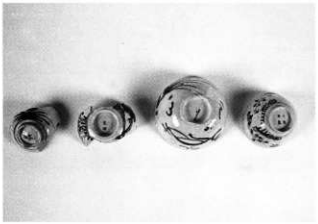
出土遺物

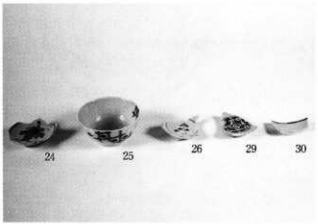
20～23・25～28・30・31・34～40は、肥前磁器である。20は、染付碗である。高台内面に１列圏線、同外面に３列圏線、見込みに２列圏線を有する。21は、染付碗である。外面には草花文、高台内面に１列圏線を有し、「官明」銘款がみられる。22は、染付碗である。薄手の大振りで、主に東南アジア向けの輸出仕様である。内面見込みに荒磯文、外面に龍に鳳凰文が施される。23は、染付碗である。高台外面に２列圏線を有し、高台内面には「大明年製」銘款がみられる。25は、染付碗である。内外面には格子に梅花文が施され、畳付けは釉剥ぎとなる。高台内面には「宣明年製」銘款がみられる。26は、染付碗である。底部のみで全容は不明であるが、高台外面には２列圏線が施され、高台内面には「宣明年製」銘款がみられる。27は、色絵碗である。色絵の剥落が大きいが内外面に草花文・釉はじきがみられる。高台外面に２列圏線の痕跡を確認できる。28は、色絵碗である。色絵の剥落がみられるが外面に草花文が施されている。高台外面に２列圏線がみられる。30は、染付碗で20と同デザインとみられる。31は、青磁碗で、高台は無釉となっている。34は、白磁小坏である。畳付けは釉剥ぎとなる。35は、染付小坏である。外面は網目文で、畳付けは釉剥ぎとなる。36は、染付碗である。口縁端部は外反し、底部の一部は露胎となっている。37は、染付碗である。口縁端部は外反し、外面口縁端部及び高台内面に各々２列圏線を有する。38は、染付小瓶である。外面に植物文が施され、底部は露胎となる。39は、染付火入又は碗である。高台内面に「宣明年製」銘款がみられる。40は、色絵人形である。唐子が牛に乗るタイプである。24・29は、中国・景徳鎮窯の磁器・染付碗である。24は、内外面に葡萄文が施され、高台内面に「大明成化年製」銘款がみられる。29は、高台外面に３列圏線、高台内面に２列圏線が施され、高台内面には「天下太平」銘款がみられる。32・33は、肥前陶器の呉器手碗である。何れも同一タイプであるが、32は焼成不良で淡白色を呈している。41～43・48は、肥前陶器皿である。41・42は、焼成不良で淡灰白色を呈し、見込み釉剥ぎで底部は露胎となっている。43は、41・42と同一タイプで、焼成が若干あまい程度で灰白色を呈している。48は、見込み・畳付けに砂目痕が残る。見込み釉剥ぎに底部露胎となっている。44～47・49～52は肥前磁器である。44・45

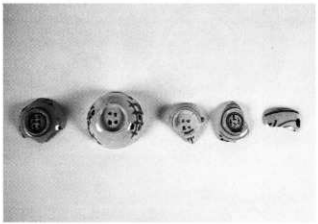


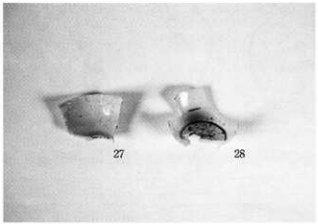
第14図　土壙4　出土遺物実測図1（1／3）

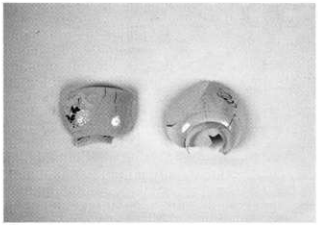


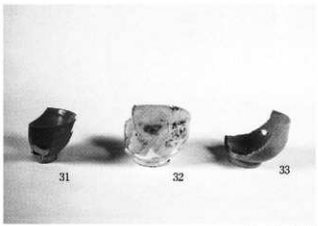


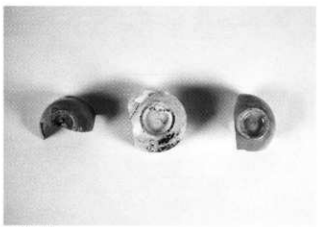




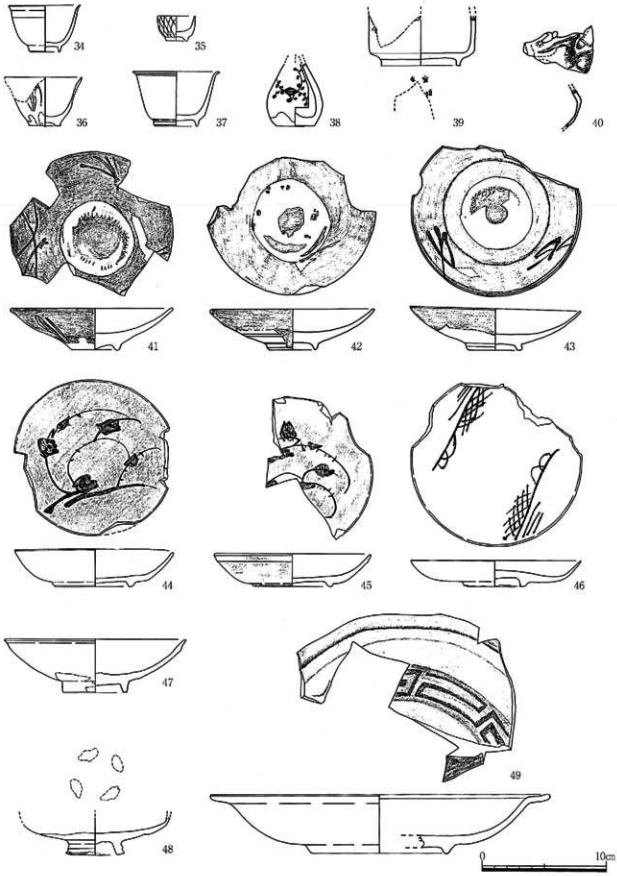




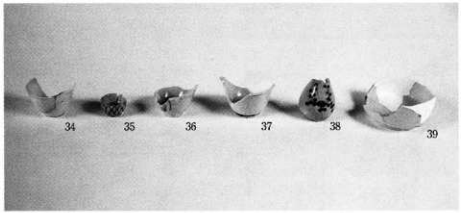


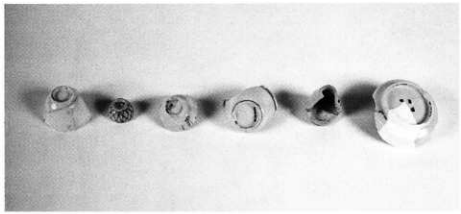


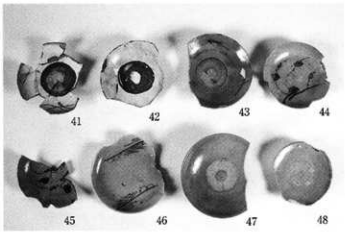
PL.19　土壙4　出土遺物1

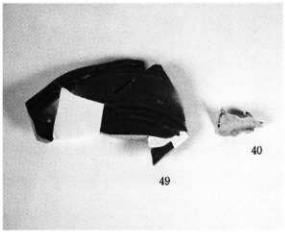


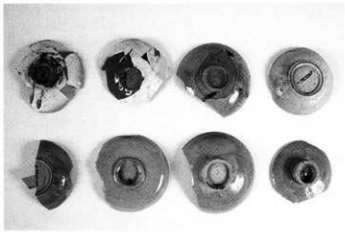
第15図　土壙4　出土遺物実測図2（1／3）

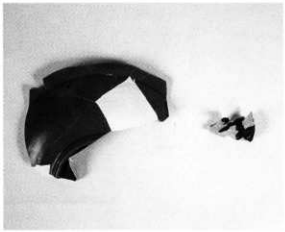




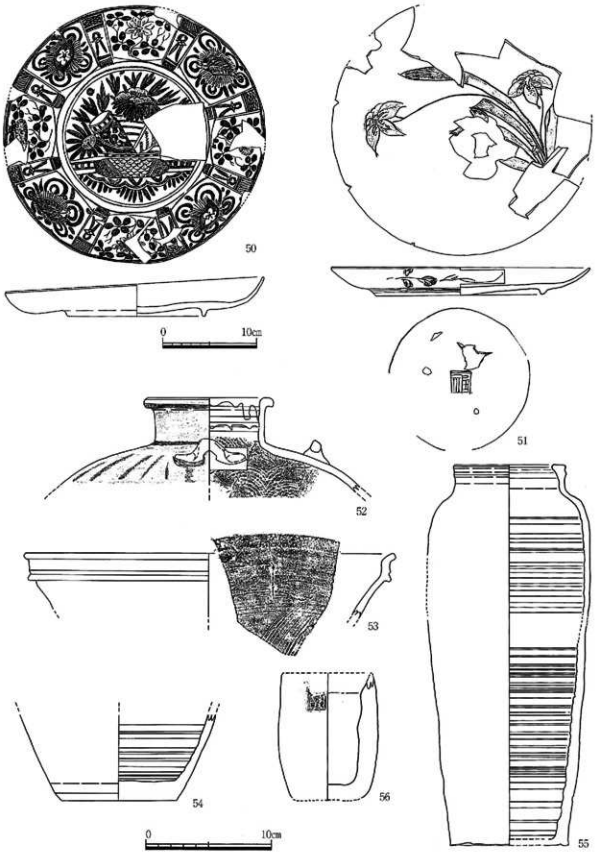




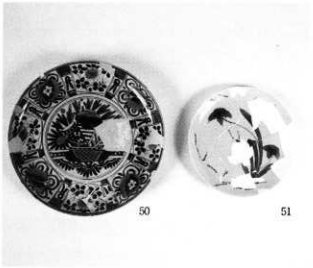


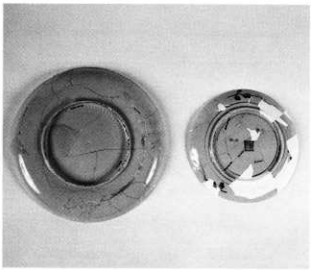


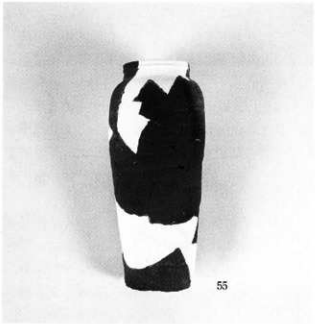
PL.20　土壙4　出土遺物2



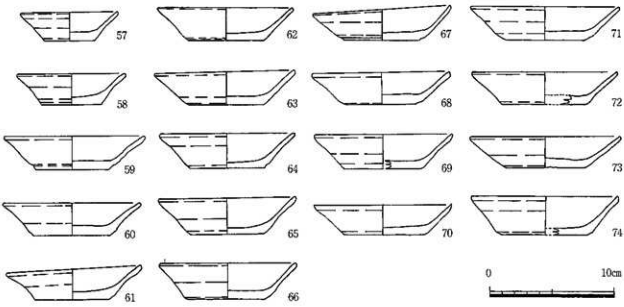
第16図　土壙4　出土遺物実測図3（1／3）（1／4・50のみ）







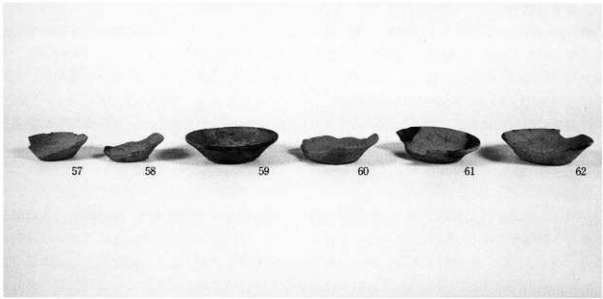
PL.21　土壙4　出土遺物3

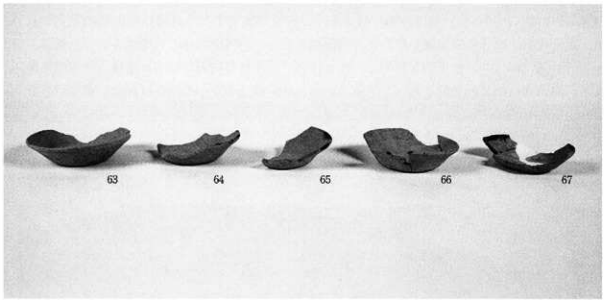


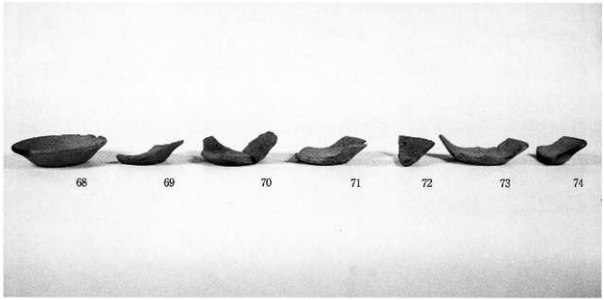
第17図　土壙4　出土遺物実測図4（1／3）

は染付皿で、陶器質の素地となっており赤味を帯び、釉はじきがみられる。46は、染付皿で畳付けに砂目を有している。47は、青磁皿である。見込み釉剥ぎで、底部は露胎となる。内外面に貫入がみられる。49は、青磁輪花大皿である。内面は篦彫模様が施されている。高台内面は錆釉がかけられている。50は、染付皿である。肥前の長吉谷窯産で、本来輸出用製品であるが、器形にヘタリがあることから国内流通用に回されたものと考えられる。内面には芙蓉手花籠文が施され、畳付けは砂目を有している。51は、染付皿である。内面に草花文が施され、高台内面にはハリ支え3カ所と「福」銘款がみられる。52は、四耳壺である。外面に褐色釉がかけられ、内面には同心円文タタキ痕が残る。53は、肥前陶器の擂鉢である。54は、全調査区の一括資料として取り上げられたもので、北部九州（福岡）産とみられる。55は、ベトナム産の壺である。これまでの市内調査において、東南アジアで生産された資料として初めて確認された。56は、焼塩壺である。外面に「・・・衛門」の刻印から、延岡城関連の調査で出土している「・・・藤左衛門」の可能性が高く、大阪府堺市で生産されたものと考えられる。57～74は、土師器小皿である。このうち約半数にはススが付着していることから、主に灯明皿として利用されていたものと考えられる。131・133（PL.35）は肥前陶器である。131は、玉子手皿である。内外面に貫入がみられ、見込みには胎土目積み痕を有している。133（PL.35）は、碗である。胎土は軟質で、外面に緑釉を施し、釉はじきがみられる。

130・132（PL.35）は肥前磁器である。130は、染付碗である。外面に緑釉をかけている。内外面に貫入がみられ、畳付けは焼成時の釉薬溶着に伴う剥ぎ取りのため一部欠損している。132は、染付碗である。内面には桐花唐草文、外面には植物文が施されている。134・135（PL.35）は中国磁器である。134は、五彩手碗で、高台内面に2重圏線、同外面に3重圏線を有している。135は、龍泉窯製の青磁碗である。外面には蓮弁文が施されている。







PL.22　土壙4　出土遺物4

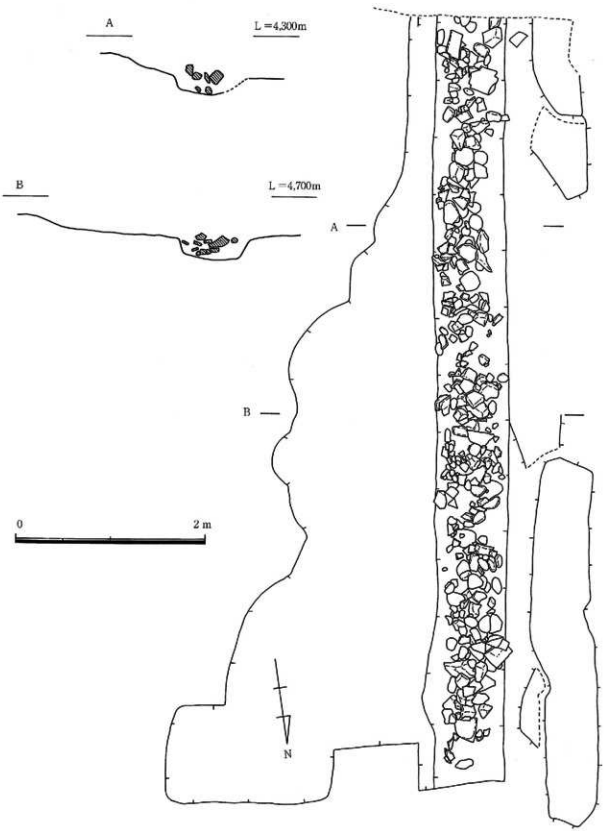
（8）溝状遺構１

遺構面検出段階において、Ｂ・Ｃ－２区～Ｂ・Ｃ－５区にかけて検出され、調査区南面中央部から石垣遺構１の逆Ｊ字部分（調査区中央部）に繋がっているのが確認された。規模は、幅約1.0m、深さ約0.3m、長さ約8.0m以上を測る。調査区何面中央部から石垣遺構１の逆Ｊ字部分に繋がり、その接点には直径約10～20cmの河原石及び角礫を石垣状に３～４段積み上げらている。溝には５～15cmの河原石が煩雑に敷き詰められ、その上部に平瓦等の瓦類、陶磁器類が散在している。礫間及び底部には粘土質の土壌が堆積しており、水が滞留していたことが伺える。遺物は、17世紀後半～18世紀前半の肥前陶磁器、平瓦などが検出されている。

出土遺物

75～81は、肥前磁器である。75は、染付碗である。外面は山水文が施され、高台内面に１列圏線、同外面に２列圏線を有している。さらに、高台内面には「成囮年製」銘款がみられ、畳付けは釉剥ぎとなっている。76は、染付碗である。見込みに五弁花コンニャク印、外面に鮑唐草文に植物文が施されている。高台内面には、「大明成化年製」銘款をもち、１列圏線、同外面には２列圏線を有している。77は、染付碗である。外面に草花文、高台内面に「大明年製」銘款、１列圏線を有し、同外面には2列圏線が施されている。78は、染付碗である。内面は無文で、外面には竹垣鳥草花文が施されている。高台内面には「大明年製」銘款、１列圏線を有し、同外面には２列圏線をもつ。79は、染付碗である。外面にはコンニャク印を利用した竹文が施され、高台内面には１列圏線、「大明年製」銘款を有し、同外面には２列圏線をもっている。80は、染付碗である。外面には梅花に笹文が施され、高

PL.23　溝状遺構１　検出状況

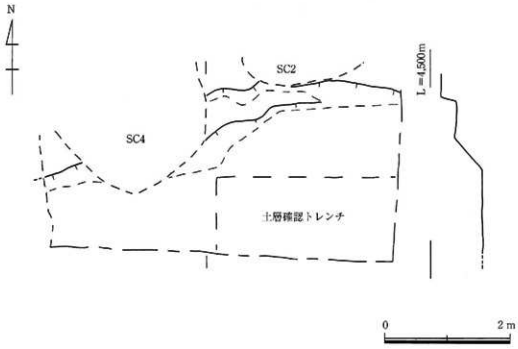


第18図　溝状遺構1　実測図（1／40）

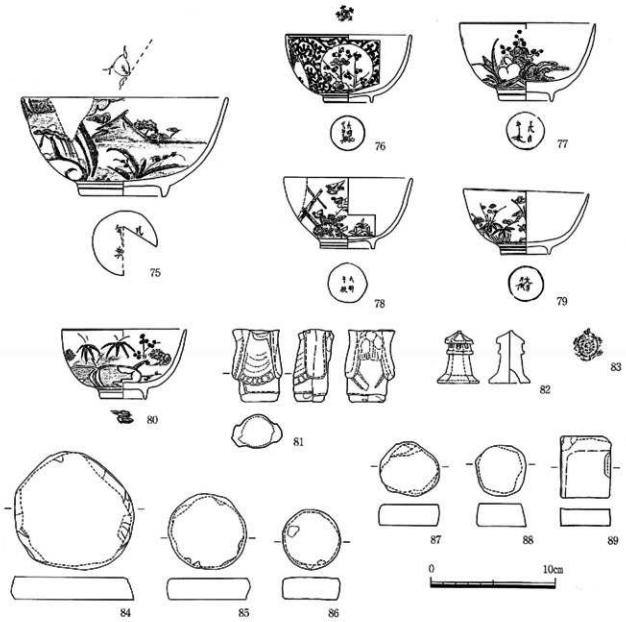
台内面には「渦福」、同外面に2列圏線を有している。81は、白磁人形である。人物は唐人で、型取り成形によって作出されている。107は、平瓦である。側面に「宮下新右衛門」の刻印がみられる。114は、平瓦で、刻印は見受けられない。136・137・139～141（PL.36）・144（PL.37）は肥前磁器である。136は、染付猪口である。高台内面に1列圏線を有し、「大明年製」銘款がみられる。畳付けは釉剥ぎとなる。137は、染付鉢蓋である。外面に花唐草文が施されている。139は、染付大皿で一括資料として取り上げている。内面に山水文が施され、畳付けは釉剥ぎとなっている。140は、染付大皿で、高台内面に1列圏線が施されている。内外面に貫入がみられる。141は、白磁紅皿である。138（PL.36）は、肥前陶器の壺蓋である。内面には糸切り痕が残っている。

PL.24　溝状遺構2　遺物出土状況

PL.25　溝状遺構2　全景



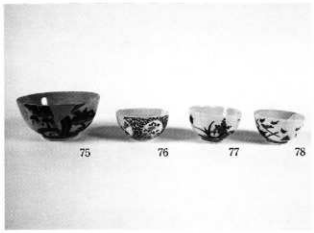
第19図　溝状遺構2　実測図（1／60）

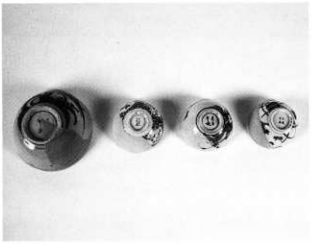


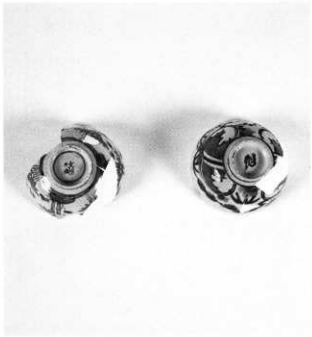
第20図　溝状遺構１・２　出土遺物実測図（１／３）

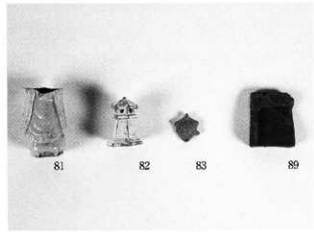
（9）溝状遺構２

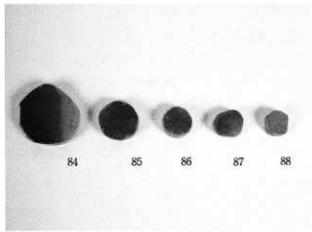
遺構面検出段階において、Ｂ－５区～Ｄ－５区にかけて検出された。東西方向に延びており、遺構の南側・東側ラインは調査区外に広がっていた。西側は大溝遺構及び土壙４と切り合いが確認され、土層観察から土壙４が新しいことが判っている。規模は、最大幅2.7m、深さ約0.5m、長さ約5.0m以上を測る。埋土中には直径約10cm～20cmの河原石が大量に投棄され、石間から18世紀～19世紀代の肥前陶磁器を中心に17世紀前半～19世紀代の陶磁器類の他、炭化物が多く検出された。











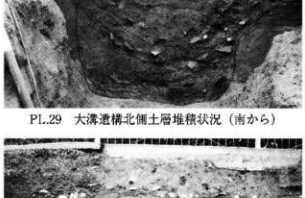
PL.26　溝状遺構1・2　出土遺物

出土遺物

82は、関西系土製品の石灯籠である。箱庭道具とみられ、表面には白色釉がかけられ、角部分は擦れて摩滅している。83は、関西系土製品の土人形である。亀形を呈し、玩具とみられる。84～88は、瓦玉である。玩具または敲石として利用されたと考えられている。いづれも平瓦の2次利用製品とみられ、側面には玉状に成形する際の擦痕が残っている。89は、石製品の硯である。欠損品または未完成品の2次利用とみられ、側面は砥石によって磨かれている。墨受けは、墨漏れを防ぐため、角部分を深めに加工されている。117は、明石産の擂鉢である。内面底部に4条の擂り目がみられる。118は、瓦質土器の火鉢で、産地は不明である。142・144・147・148・154～156（PL.37）は肥前磁器である。142は、染付碗である。外面に輪花文が施され、内外面に貫入がみられる。144は、染付碗である。高台内面には「大明年製」銘款を有し、畳付けは釉剥ぎとなっている。147は、小坏である。内面に釉だれがみられ、畳付け周辺は露胎となっている。148は、染付猪口である。外面に氷裂花文が施される。154は、白磁紅皿である。内外面の一部に釉薬がかかっている。155は、鶏形の色絵人形である。156は、唐人の人形である。顔面に褐釉がかかっている。143（PL.37）は、瀬戸美濃磁器の染付碗である。145（PL.37）は、瀬戸美濃磁器の染付碗蓋である。146（PL.37）は、関西系磁器の染付小碗である。高台内面に「玩」？銘款を有し、畳付けは釉剥ぎとなる。153（PL.37）は、中国・漳州窯産磁器の色絵碗である。呉須赤絵がみられ、一部は剥落している。149（PL.37）は、肥前陶器の碗である。ヒビ焼きによって貫入がみられ、畳付けは釉剥ぎとなっている。150（PL.37）は、肥前陶器の碗である。内外面に巻刷毛目が施され、見込みには別品の底部残欠が残っている。畳付けは砂目を有するが、剥ぎ取り時に溶結による欠損がみられる。151（PL.37）は、肥前陶器の蕎手碗である。152（PL.37）は、肥前陶器の碗である。内外面の一部に貫入がみられ、畳付けは釉剥ぎとなっている。157（PL.37）は、肥前または福岡産陶器の壺蓋である。ツマミを有し、

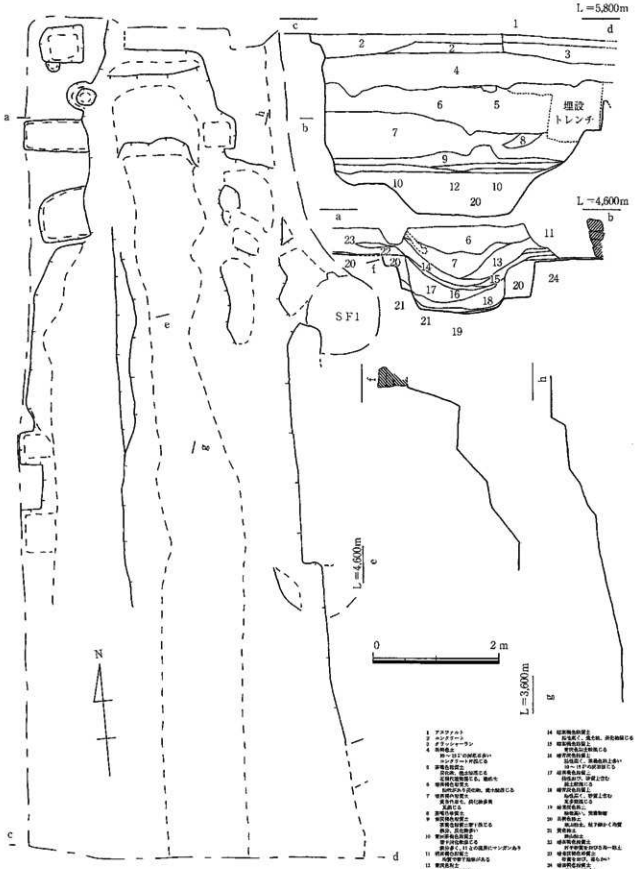
PL.27　大溝遺構全景（東から）

PL.28　大溝遺構遺物出土状況



PL.29　大溝遺構北側土層堆積状況（南から）

PL.30　大溝遺構南側土層堆積状況（北から）



第21図　大清遺構実測図（1／60）

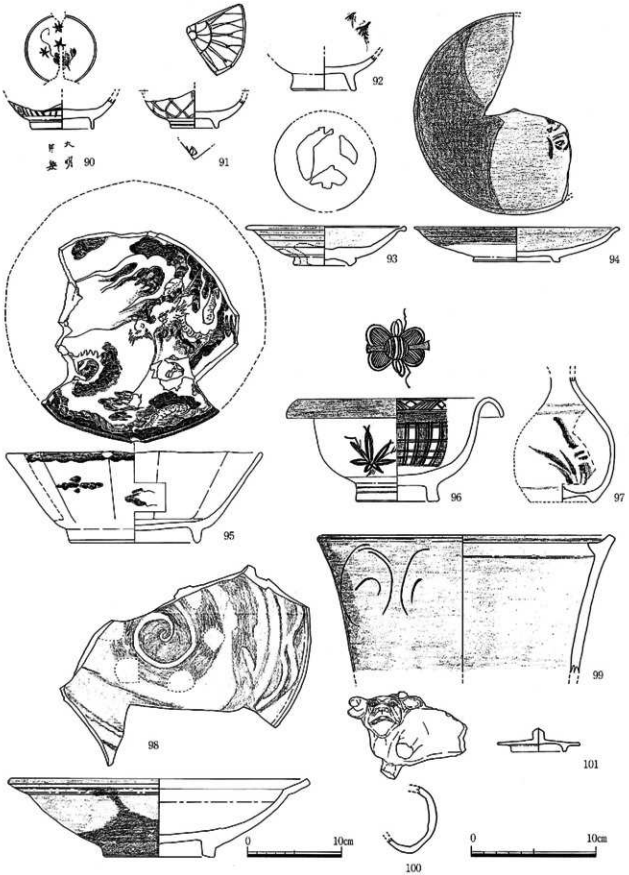
外面に鉄釉が施されている。158（PL.37）は、関西系陶器の皿である。軟質陶器で、型打ちによって魚形に成形されている。159（PL.37）は、瀬戸美濃陶器の植木鉢である。外面は鉄釉が施され、内面は口縁部周辺に鉄釉、下位には錆釉が施されている。

（10）大溝遺構

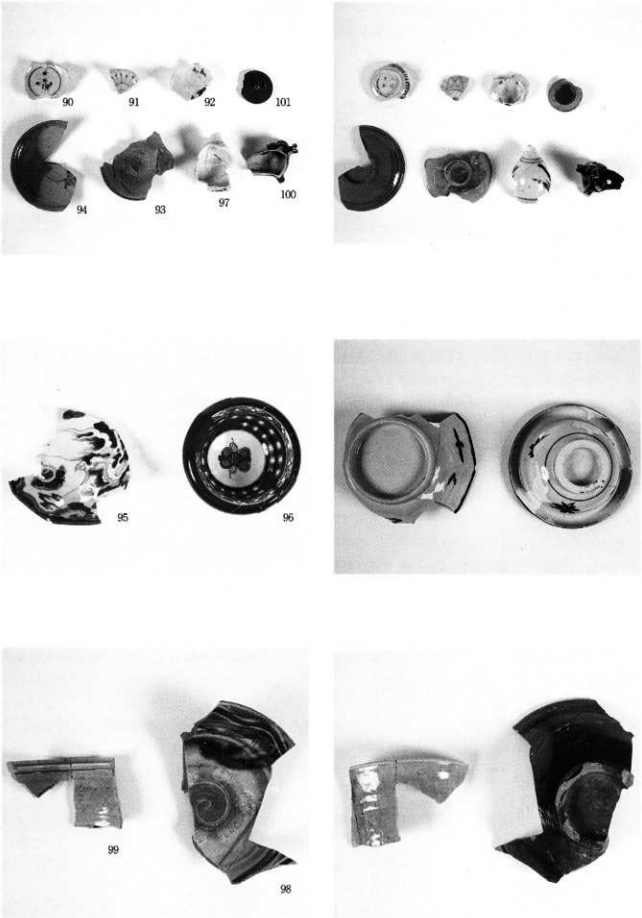
遺構面検出段階においては明瞭に観察されなかったが、石垣遺構の前面（西側）に設定した土層断面観察によって本遺構を確認した。A・B－1区～A・B－5にかけて検出され、その規模は調査区全体の1／3以上に達する。A・B－1区で底面が長軸方向に3段のスロープ状に立ち上がり、本遺構の北端部が確認された。全体はほぼ南北方向に延び、断面形状は箱形を呈している。A－2区より北側は内壁ライン幅が狭くなり、上端部幅約2.2m、底部幅約1.0m、深さ約0.9m、長さ約3.0mを測る。南側は上端部幅約5.3m以上、深さ約1.4m、長さ約10.0m以上を測り、北側を含めた総延長は13.0m以上に達する。底部は北方向に若干傾斜しており水は北端部に貯まる構造になっていたようで、北側上層断面観察（a－b）において水の滞留を示す暗青灰色粘質土が厚く検出されている。また、B－1・2区からは、不定形ではあるが斜め方向に階段状になった3段の平坦面が確認された。出土遺物は、17世紀前半～19世紀代の肥前陶磁器を中心に、関西系陶磁器、瀬戸美濃磁器、中国磁器、丸山焼（蓬莱産焼・延岡市）・庵川焼（東臼杵郡門川町）？の磁器が確認されている。

出土遺物

90、91、95～97は、肥前磁器である。90は、染付碗である。見込みに花文が施され、高台内面には「大明年製」銘款がみられる。91は、染付碗である。内外面に二重網目文が施され、高台内面には渦福？がみられる。95は、染付十角鉢である。内面には雲龍文、外面には雲文が施され、畳付けは釉剥ぎとなっている。96は、染付鉢である。内面には格子文、外面には楓文が施され、畳付けは釉剥ぎとなっている。97は、染付瓶である。外面に植物文が施され、底部は露胎となっている。100は、関西系磁器の青磁人形である。形状は牛で、口には穿孔がみられる。92、93、98は肥前陶器である。92は、色絵碗で、呉器手碗と呼ばれている。見込みに色絵が施され、高台内面には竈隠しがみられる。93は、溝縁皿である。見込みに胎土目積み痕がみられる。外面は釉だれがみられ、底部は露胎となっている。98は、二彩大皿である。内面には波状文が施され、見込みに胎土目積み痕がみられる。底部は露胎となっている。94は、丸山焼の陶器皿である。内面には掛分がみられ、見込みに銘が施されている。外面は露胎となっている。99は、瀬戸美濃陶器の火鉢である。外面に線彫文が施されている。101は、関西系又は福岡産陶器の壺蓋である。104は、軒丸瓦である。連珠三巴文右巻16珠？で、一部に圏線がみられる。106は、平瓦である。側面に「違い釘抜き紋」の刻印が施されている。表面には、火災によるとみられる受熱による変色がみられる。112は、形状は不明であるが瓦とみられる。160、161、163、164、168～172（PL.38）は、肥前磁器である。160は、染付碗である。外面に網目文が施され、高台内面に1列圏線、同外面に3列圏線がみられる。161は、染付碗である。外面に赤松文が施され、内外面には貫入がみられる。163は、青磁染付碗である。見込みに模様があり、外面底部は露胎で、高台内面は兎巾状になっている。内外面には貫入がみられる。164は、広東碗蓋である。ツマミ内面に唐人文がみられる。内面には、鳥に草花文が施されている。168は、色絵角皿である。内面には雲龍文、外面には唐草文が施されている。畳付けは無釉となっている。169は、染付皿である。50と同一タイプで、内面には美蓉手文、畳付けは釉剥ぎとなっている。170は、染付皿である。高台内面には「成化年製」銘款の一部がみられる。171、172は、青磁皿である。見込みは釉剥ぎで、底部は露胎となっている。高台内面は兎巾状になっている。162（PL.38）は、庵川焼？の磁器染付碗である。



第22図　大溝遺構出土遺物実測図（1／3）（1／4・98のみ）



PL.31　大溝遺構出土遺物

外面には風景文が施され、見込みに模様がみられる。釉薬はたっぷりかけられ、内外面には貫入がみられる。畳付けは釉剥ぎとなっている。165（PL.38）は、中国景徳鎮窯産の磁器の染付小坏である。端反碗で外面の口縁端部に1列圏線がみられる。167（PL.38）は、関西系磁器の猪口である。外面に銹絵鳥文が施され、2列の篦彫がみられる。底部は露胎となり、割高台が3カ所みられる。166（PL.38）は、丸山焼（蓬莱産焼）陶器の小坏である。見込みに「無」又は「魚」？文字があり、内外面に貫入がみられる。底部は露胎となっている。内面には灰釉がかけられ、貫入がみられる。173（PL.38）は、肥前陶器の皿である。内外面に胎土目積み痕がみられ、見込みの一部及び底部は露胎となっている。174（PL.38）は、肥前陶器の皿である。41、42と同一タイプで、焼成不良、底部露胎、高台内面は兎巾状になっている。175（PL.38）は、肥前陶器の鉢である。内面は、白土による刷毛目模様が施され、外面は露胎となっている。内面には、砂目積み痕が残っている。176（PL.38）は、堺産の陶器擂鉢である。

第3章　おわりに

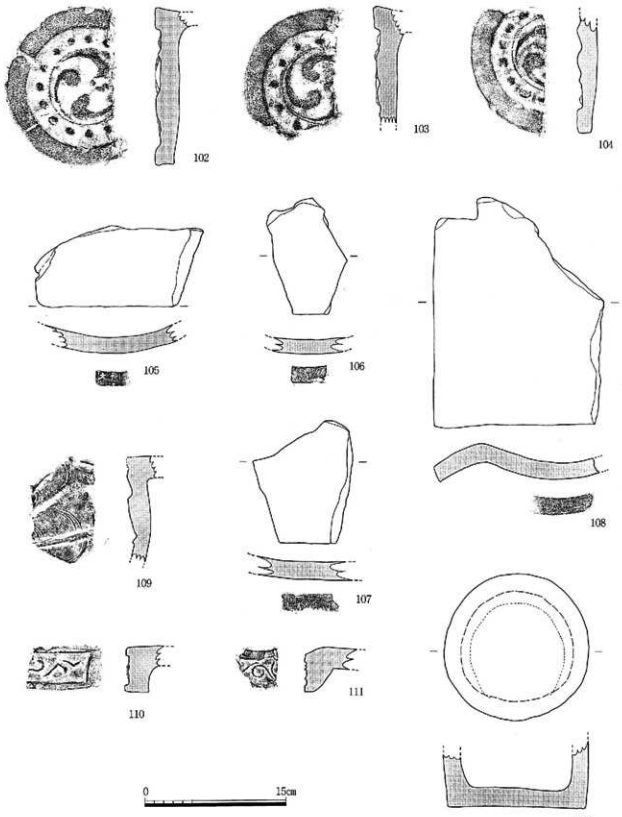
今回の調査では、これまでの延岡城関係遺跡とは性格を異にするものであった。従来の調査地点は、幕末～明治維新後に大量の遺物が廃棄された内堀跡をはじめ、馬屋跡、城内の曲輪群及び通路・門跡といったもので、生活空間の場である屋敷地の調査事例としては城下において初の事例となった。したがって、遺構及び遺物の性格が違い、延岡城下の生活の様相及び地域間交流・交易といったものが垣間見えてくるものとなった。以下、主な遺構、遺物について若干の検討を加えてみたい。

遺　構

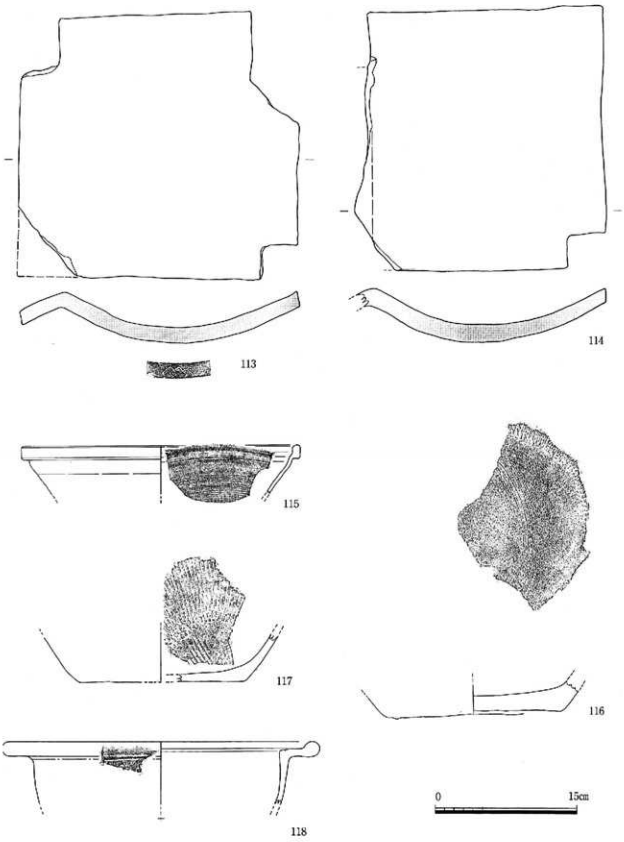
本調査において、面積的にも多くを占めた大溝遺構は、北側端部が検出され、その東側壁面付近には、やや階段状になった段差がみられ、南側は調査区外に続いていることが確認された。その延長線上約50mの位置に東西方向に存在していた内堀跡が所在することや、溝の床面が北側に下っていることから、内堀からの水が流れていた可能性が高いと考えられる。年代的には、最下層付近から採集された炭化物の放射性炭素年代測定によって、県城（延岡城）築城前後の年代が得られている。このことは、城の縄張り段階において、普請と作事に絡む運搬手段としても利用されたことを伺わせるもので、当時の絵図史料等にも記載が見られないことから、その他の屋敷地にも同様の大溝遺構が存在している可能性も指摘されよう。もう1点考えられることは、築城時において、当初計画では大溝遺構が五ヶ瀬川方面への水路としての思惑があったが、何らかの理由により中断されたとも考えられる。この点については、絵図史料によると、大溝遺構より東約100mの地点に五ヶ瀬川に通じる堀があって幅四間半（約8.2m）との記載がみられ、大溝遺構の南側幅が匹敵する可能性も考えられるが、今後の周辺地の調査事例を鑑みて判断する必要があろう。何れにしても、遺物の年代観は17世紀初頭～19世紀代まで万遍なく見受けられることから、遺構として江戸初期から幕末まで存在していたことが裏付けられよう。

溝状遺構1は、大溝遺構に並行して河原石が敷き詰められ排水溝状を呈していることから、雨水等の排水機能と大溝遺構に雨水等の排水が東側から直接流れて斜面崩落を引き起こすことを防止する目的を有していたことが推定できる。遺構の年代観は、直下に土壙4が切り合っていたことから、17世紀後半以降に存在していたことが考えられよう。

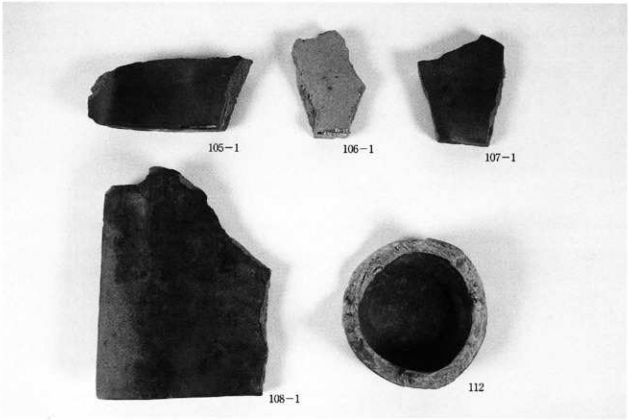
溝状遺構2は、全容は不明であるが、陶磁器類、瓦類とともに大量の河原石が検出されている。遺

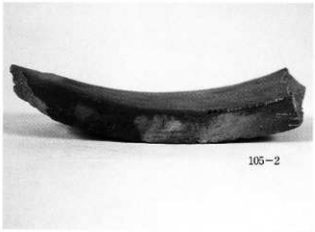


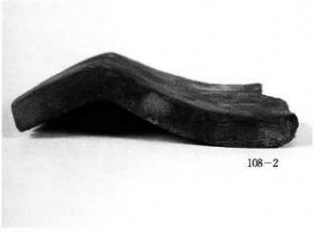
第23図　その他の出土遺物実測図１（１／４）



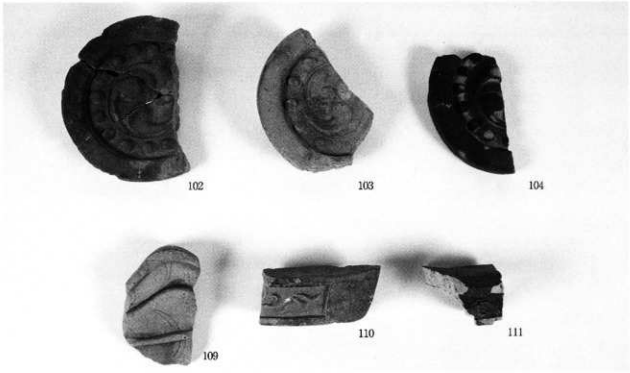
第24図　その他の出土遺物実測図２（１／４）

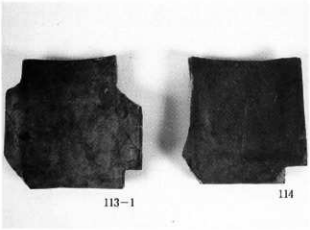


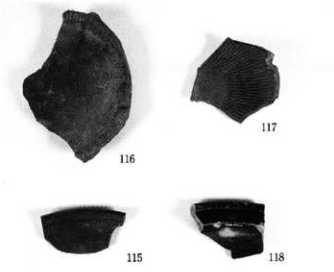


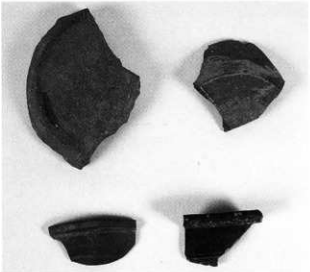


PL.32　その他の出土遺物（瓦類）









PL.33　その他の出土遺物（瓦類・陶器ほか）

構の性格としては排水施設及び廃棄遺構として考えられるが、他遺構にはみられない箱庭道具や玩具が検出されていることから、本遺構及び周辺地において、遊び場等何らかの娯楽機能を有するゾーンが存在していたことも考えられよう。

井戸遺構２は、素掘りであったことが確認されている。同規模の井戸遺構は、延岡城内堀跡（カルチャープラザのべおか）調査においても検出されており、底部には板材で井桁が組まれ上部に河原石を円形状に積み上げる構造になっていたことが判明している。本遺構には、そのような下部遺構は検出されていないが、土層断面観察によって底部中央付近に円筒形を呈する茶褐色砂質土が確認されていることから、同形状を呈していたことが推定されよう。

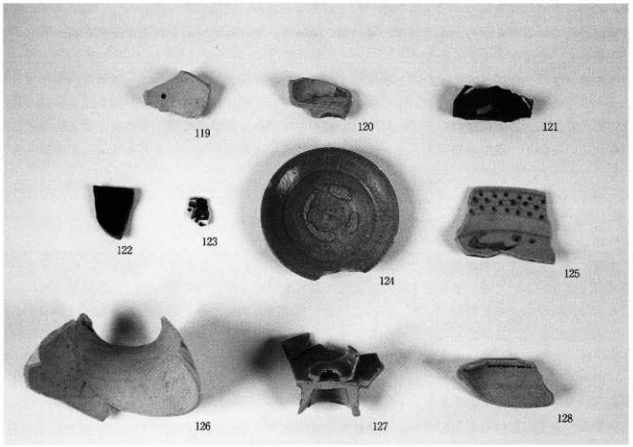
土壙については、基本的に廃棄遺構と考えられよう。

遺　物

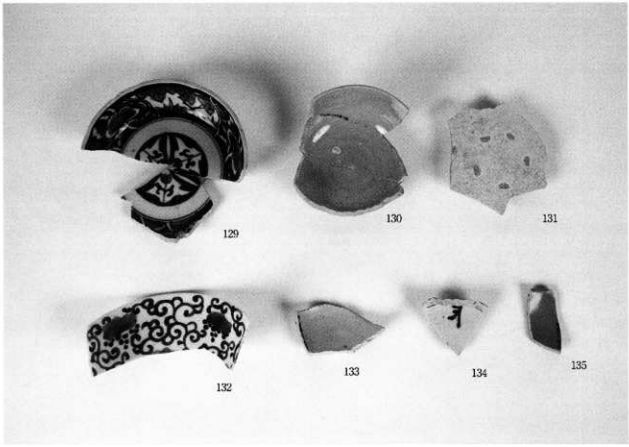
土壙４は、土壙２と共にまとまった陶磁器資料が出土している。なかでも本遺構は、これまでの延岡城関連調査において唯一とも云える16世紀末～17世紀代の一括資料が得られ、自然科学分析によってもほぼ同時期のデータが出ている。資料の多くが佐賀県有田地方を中心とした肥前陶磁器類が占め、一部には輸出仕様の高級品も見受けられている。また、中国磁器（景徳鎮窯、龍泉窯など）の染付碗、五彩手碗、青磁碗が検出された他、本市内における初例でもあるベトナム陶器も確認されるなど、豊後（府内、臼杵、佐伯など）及び日向（延岡、細島など）の海上交通及び陸上交通を利用した活発な交易活動を彷彿させるものである。ただし、陸上交易ルートついては、肥後（熊本）、豊後竹田方面の交易ルート上における遺物の様相とも検証する必要があろう。

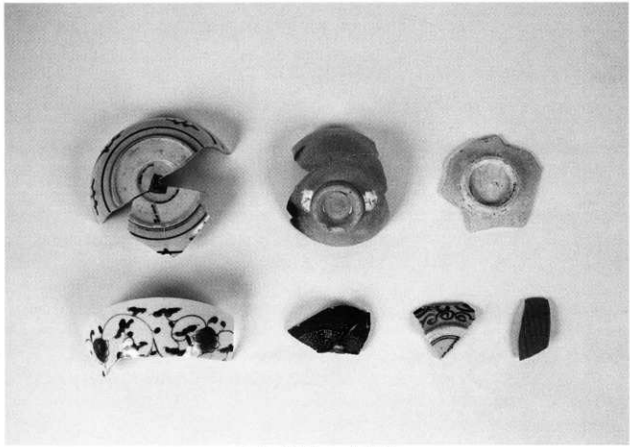
また、金般的な遺物の様相について、食器としての陶磁器についても質の高いものが使用されているほか、調理用品の擂鉢、調味料に関する焼塩壺、照明器具の灯明皿、暖房器具の火鉢、煙草などに関する火入、茶道具の碗、土瓶、化粧用品の紅皿、玩具・娯楽用品の人形、瓦玉、箱庭道具、碁石、植木鉢などが出土しており、当時の城下の風景のみならず武家屋敷における日々の生活の様相が想像できる資料といえよう。

この他、これまでの延岡城跡調査で大量の陶磁器類が出土している内堀（カルチャープラザのべおか）における陶磁器類の流入状況を見た場合、江戸初期から18世紀代までは肥前の独壇場で、若干の中国磁器の流入が見られる程度であるが、18世紀後半から瀬戸美濃に代表される他窯業地製品の流入が始まり、19世紀前半にかけて延岡藩領内の小峰窯、庵川窯、丸山窯での陶磁器生産が開始されると在地製品も散見されるようになり、19世紀後半なると肥前製品は激減する傾向がみられるようである。しかしながら、武家屋敷地である本遺跡では、肥前陶磁器が19世紀後半まで万遍なく出土しており、遺跡の様相に違いが見受けられる。これは、堀の管理・浚渫が緩慢になった幕末以降に一括廃棄された資料が多く検出される内堀の性格にもよるとは考えられるが、今後の城下及び城下町調査や、他地域における遺跡群の様相との比較検証が課題といえよう。

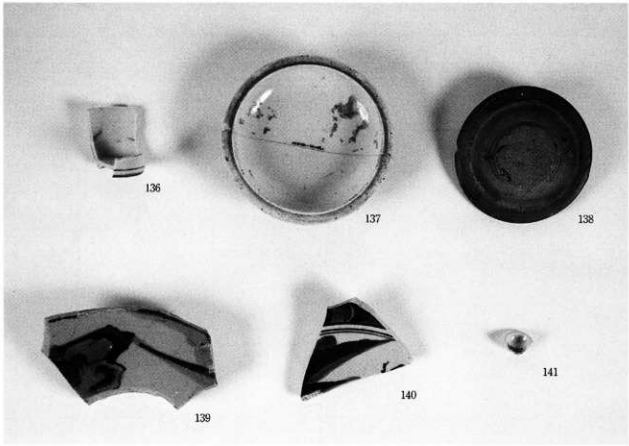


PL.34　井戸遺構1・2　出土遺物

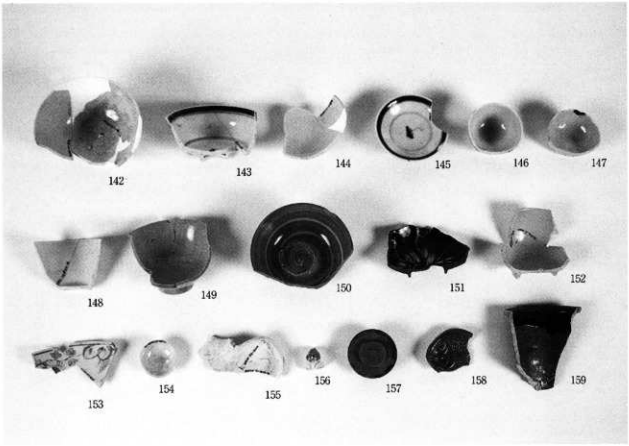


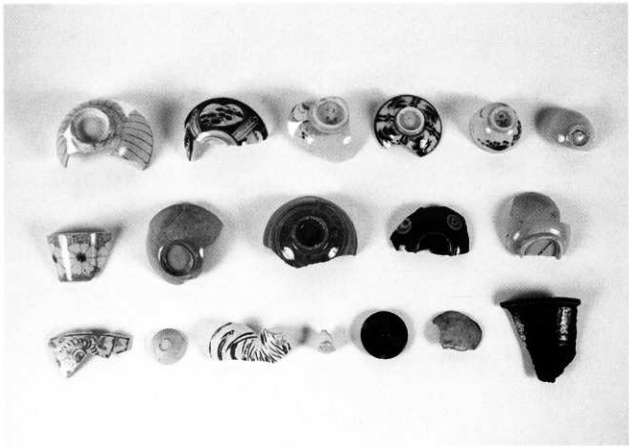


PL.35　土壙2・4　出土遺物

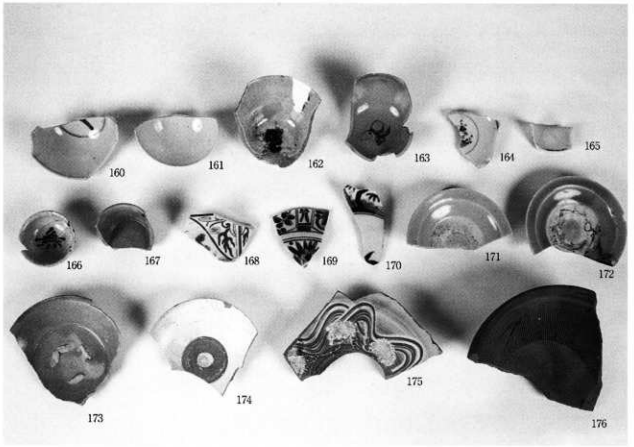


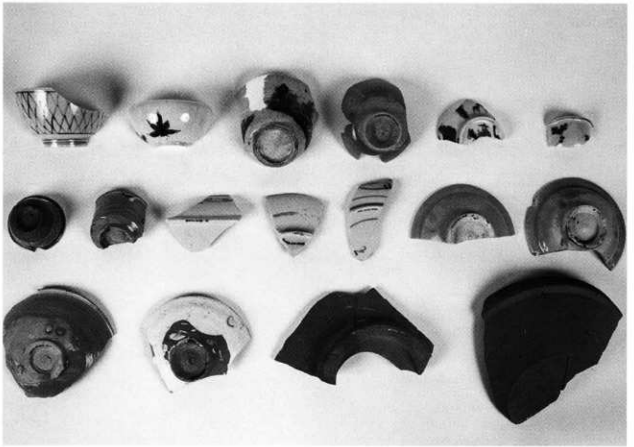
PL.36　溝状遺構1　出土遺物





PL.37　溝状遺構1・2　出土遺物





PL.38　大溝遺構　出土遺物

図面番号	種別	器種	出土地点	法量			形態及び文様	色調		備考
				口径・長	底径・幅	器高・厚		外面	内面	
1	磁器	小鉢	SF−2 一括	8.7	3.6	5.5	畳付露胎・砂目有	黒茶褐色	灰白色	肥前 1630〜1640年代
2	土師器	小皿	ピット12 一括	11.3	6.0	2.8	糸切り底	暗橙褐色	暗橙褐色	口縁端部にスス付着
3	磁器	染付碗	SC−2 No83	11.2	4.7	5.2	外面コンニャク印 内面二重圏線 見込み釉剥ぎ・五弁花コンニャク印・砂目有	淡灰白色	淡灰白色	肥前 18世紀前〜中頃
4	陶器	碗	SC−1 No3	11.8	5.0	5.4	内外面白土刷毛目	黄茶褐色	黄茶褐色	肥前 18世紀前半
5	磁器	染付碗	SC−2 No13	8.4	5.4	4.4	見込み「寿」 外面文字 赤壁に関する模様	白色	白色	関西系 1820〜1860年代
6	磁器	染付碗	SC−2 一括	9.2	4.0	4.9	端反碗	淡青白色	淡青白色	瀬戸美濃・19世紀
7	磁器	碗	SC−2 No25・52	8.6	3.1	4.5	端反碗 内外面貫入有 底部露胎	淡緑色	淡緑色	延岡・丸山焼 19世紀
8	磁器	碗	SC−2 No71	4.2	2.8	4.8	端反碗 内外面貫入有 底部露胎	淡緑色	淡緑色	延岡・丸山焼 19世紀
9	磁器	碗	SC−2 No32	8.2	2.8	4.4	端反碗 内外面貫入有 底部露胎	淡緑色	淡緑色	延岡・丸山焼 19世紀
10	磁器	香炉	SC−2 No57		4.2		底部圏線2列	淡青白色	淡青白色	肥前系 18世紀後半〜19世紀前半
11	磁器	灯火具	SC−2 No54		4.5	3.4	底部露胎	淡緑色	淡緑色	関西系 19世紀前半
12	磁器	染付皿	SC−2 一括	5.4	8.4	1.9	内外面模様	淡青白色	淡青白色	瀬戸美濃 1820〜幕末
13	陶器	植木鉢	SC−1 一括	12.7			内面口縁部・外面黒褐色釉	黒褐色	淡灰褐色	福岡又は中国(清朝) 18〜19世紀
14	陶器	算盤型土瓶	SC−2 一括	7.0	7.4	11.8	褐釉	褐色	淡褐色	関西系 19世紀
15	陶器	行平鍋蓋	SC−2 No45	15.0		4.0	外面無釉に4列飛鉋	淡明褐色	淡緑黄色	関西系 19世紀
16	陶器	焼塩壺	SC−2 一括	7.4	4.2	7.1	内外面回転ナデ	赤褐色	赤褐色	
17	石製品	碁石	SC−2 No3	2.2		0.5	黒	黒色	黒色	
18	古銭	寛永通寳	SC−2 一括	2.3				青灰褐色		
19	古銭	寛永通寳	SC−2 一括	2.5			半分欠損	青灰褐色		
20	磁器	染付碗	SC−4 最下層	11.4	4.6	6.3	高台外面に3列の圏線 高台内面に銘款	白色	白色	肥前 1660〜1670年代 30と同一タイプ
21	磁器	染付碗	SC−4 最下層	11.7	5.2	5.2	外面草花文 高台内面圏線有・「宣明」銘款	白色	白色	肥前 1670〜1680年代
22	磁器	染付碗	SC−4 最下層	14.9	5.6	7.8	内外面に貫入有 見込み荒磯文 外面龍に鳳凰文	白色	白色	肥前 1655〜1670年代 輸出品(東南アジア)
23	磁器	染付碗	SC−4 一括	11.6	4.7	6.1	高台内面「大明年製」銘款	白色	白色	肥前 1670〜1680年代
24	磁器	染付碗	SC−4 一括		4.5		内外面葡萄文 高台内面「「大明成化年造」銘款 畳付け釉剥ぎ	白色	白色	中国・景徳鎮窯 1640年代
25	磁器	染付碗	SC−4 最下層	11.0	6.2	5.7	内外面に格子に梅花文 高台内面に「宣明年製」銘款 畳付け釉剥ぎ	白色	白色	肥前 1670〜1680年代
26	磁器	染付碗	SC−4 最下層		4.8		内外面模様 高台内面「宣明年製」銘款	白色	白色	肥前 17世紀後半
27	磁器	色絵碗	SC−4 最下層	11.6	5.4	5.9	内外面色絵草花文 剥落大 内外面釉はじき	白色	白色	肥前 1660〜1670年代
28	磁器	色絵碗	SC−4 最下層	11.8	5.5	6.1	内外面色絵草花文 剥落大 外面貫入有	白色	白色	肥前 1660〜1670年代
29	磁器	染付碗	SC−4 一括		4.9		高台内面「天下太平」銘款・二重圏線 畳付け釉剥ぎ	淡青白色	淡青白色	中国・景徳鎮窯 16世紀末〜17世紀初頭
30	磁器	染付碗	SC−4 最下層	12.2			口縁端部圏線有	白色	白色	肥前 1660〜1670年代 20と同一タイプ
31	磁器	青磁碗	SC−4 一括	11.2	4.4	7.2	高台無釉	淡青灰色	淡青灰色	肥前 1630〜1640年代
32	陶器	碗	SC−4 一括	12.4	5.6	8.6	畳付け露胎	淡白色	淡白色	呉器手碗 焼成不良 肥前 1630〜1670年代

第5表 延岡城内遺跡（第3次）出土遺物観察表1

33	陶　器	碗	ＳＣ－4	一括	11.8	6.0	8.1	内外面貫入有　畳付け露胎・砂目有	淡黄白色	淡黄白色	呉器手碗　肥前　1630～1670年代
34	磁　器	白磁小坏	ＳＣ－4	一括	3.5	1.3	3.3	畳付け釉剥ぎ　砂目有	白　色	白　色	肥前　17世紀後半
35	磁　器	染付小坏	ＳＣ－4	一括	3.0	1.8	2.0	外面網目文　畳付け釉剥ぎ・砂目有	白　色	白　色	肥前　1630～1660年代
36	磁　器	染付碗	ＳＣ－4	炭化物層	6.1	2.4	3.9	外面染付　底部一部無釉・砂目有	白　色	白　色	肥前　1630～1640年代
37	磁　器	染付碗	ＳＣ－4	炭化物層	6.7	3.2	4.4	口縁端部・底部圏線有　畳付砂目有	白　色	白　色	肥前　17世紀後半
38	磁　器	染付小瓶	ＳＣ－4	最下層		3.0		外面植物模様　底部露胎	淡灰白色	淡灰白色	肥前　1630～1640年代
39	磁　器	染付火入	ＳＣ－4	一括		5.8		高台内面「宣明年製」銘款	淡青白色	淡青白色	肥前　1670～1680年代
40	磁　器	色絵人形	ＳＣ－4	一括			0.3	型合わせ中空　唐子に牛	白　色	白　色	肥前　17世紀後半
41	陶　器	皿	ＳＣ－4	炭化物層　最下層	13.0	4.0	3.3	見込み釉剥ぎ　底部露胎	淡灰白色	淡灰白色	焼成不良　肥前　1630～1670年代
42	陶　器	皿	ＳＣ－4	最下層	13.0	3.6	3.3	見込み釉剥ぎ　底部露胎	淡灰白色	淡灰白色	焼成不良　肥前　1630～1670年代
43	陶　器	皿	ＳＣ－4	炭化物層	13.1	4.2	3.5	見込み釉剥ぎ・砂目有　底部露胎	灰白色	灰白色	肥前　1630～1670年代
44	磁　器	染付皿	ＳＣ－4、ＳＥ－3		12.5	5.9	2.5	草文　内外面釉はじき	淡灰白色	淡灰白色	素地は淡赤褐色　肥前　17世紀
45	磁　器	染付皿	ＳＣ－4	最下層	12.5	6.0	2.6	陶器質　内外面釉はじき	淡灰白色	淡灰白色	素地は淡赤褐色　肥前　17世紀
46	磁　器	染付皿	ＳＣ－4	一括	14.4	4.1	2.2	畳付け砂目有	灰白色	灰白色	肥前　1630～1640年代
47	磁　器	青磁皿	ＳＣ－4	炭化物層	14.2	4.5	4.2	陶器質　内外面貫入　見込み釉剥ぎ・砂目有	淡灰色	淡灰色	肥前　1640～1660年代
48	陶　器	皿	ＳＣ－4	一括		3.4		畳付け・見込み砂目4カ所有	淡灰色	淡灰色	肥前　1610～1630年代
49	磁　器	青磁輪花大皿	ＳＣ－4	最下層	27.0	10.7	4.7	内面蓮彫文様　口縁部は波状　高台内面鋳造	青緑色	青緑色	肥前　1650～1660年代
50	磁　器	染付皿	ＳＣ－4	一括	27.6	14.4	4.1	内面芙蓉手花鳥文　外面ヘタリによる積み重ね痕　畳付け砂目有	淡青白色	淡青白色	肥前・長吉谷窯　輸出仕様　1655～1670年代
51	磁　器	染付皿	ＳＣ－4	最下層	20.4	13.2	2.2	内面草花文　高台内面「福」銘款・ハリ支え有	白　色	白　色	肥前　1660～1670年代
52	磁　器	四耳壺	ＳＣ－4	最下層	9.6			内面同心円文タタキ　外面褐色釉	褐　色	淡灰色	肥前　茶壺　16世紀末～17世紀初頭
53	陶　器	擂　鉢	ＳＣ－4	最下層	29.8			口縁部に施釉	褐　色	褐　色	肥前　17世紀前半
54	陶　器	壺	一括			9.0		褐釉　外面底部墨書	褐　色	褐　色	福岡（北部九州）18～19世紀
55	陶　器	甕	ＳＣ－4	一括	8.8	4.0	3.3	内外面ヘラ削り	淡褐色	淡褐色	ベトナム　17世紀前半
56	土製品	焼塩壺	ＳＣ－4	最下層	7.1	5.4	10.2	外面［□□・衛門］刻印	赤褐色	赤褐色	19世紀
57	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	6.6	4.0	2.3	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
58	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	8.4	4.6	2.4	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部スス付着
59	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	11.1	5.8	2.7	灯明皿　糸切り底	暗褐褐色	暗褐褐色	
60	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.8	6.0	2.6	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
61	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.7	6.0	2.5	灯明皿　糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	灯角線上に多量のスス付着
62	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.8	6.0	2.2	灯明皿　糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部スス付着
63	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	11.1	6.0	2.1	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
64	土師器	小　皿	ＳＣ－4	茶褐色粘質土	10.8	6.0	2.8	糸切り底　灯明皿	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁端部にスス付着
65	土師器	小　皿	ＳＣ－4	茶褐色粘質土	11.0	6.0	2.9	糸切り底　灯明皿	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁端部にスス付着
66	土師器	小　皿	ＳＣ－4	茶褐色粘質土	11.6	6.2	2.7	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
67	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.8	6.0	2.5	糸切り底　灯明皿	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部多量スス付着
68	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.8	5.4	2.6	灯明皿　糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	対角線上にスス付着
69	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	10.8	6.0	2.8	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
70	土師器	小　皿	ＳＣ－4	一括	11.0	6.4	2.4	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	外面鉄釘付着

第６表　延岡城内遺跡（第３次）出土遺物観察表２

71	土師器	小　皿	SC−4　一括	11.6	6.2	2.7	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
72	土師器	小　皿	SC−4　一括	11.6	6.8	2.6	糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
73	土師器	小　皿	SC−4　一括	11.8	6.0	2.5	内心円状圧痕	淡赤褐色	淡赤褐色	
74	土師器	小　皿	SC−4　一括	11.8	6.8	3.1	辺明皿　糸切り底	淡赤褐色	淡赤褐色	
75	磁　器	染付碗	SE−1　一括	16.8	7.0	8.8	外面山水文　見込み模様　高台内面「成□年製」銘款・圏線有　畳付け釉剥ぎ	淡灰白色	淡灰白色	肥前　18世紀前半
76	磁　器	染付碗	SE−1　№24	9.8	3.8	5.5	見込み五弁花コンニャク印　外面鯛唐草に植物文　高台内面「大明成化年製」銘款・圏線有　畳付け釉剥ぎ	白　色	白　色	肥前　18世紀前半
77	磁　器	染付碗	SE−1　一括	10.8	6.3	4.3	外面草花文　高台外面圏線有　高台内面「大明年製」銘款　畳付け釉剥ぎ・砂目有	白　色	白　色	肥前　1690～1730年代
78	磁　器	染付碗	SE−1　№22	10.2	4.3	5.7	外面竹亀鳥草花文　高台内面「大明年製」銘款・圏線有　畳付け釉剥ぎ・砂目有	白　色	白　色	肥前　1670～1690年代
79	磁　器	染付碗	SE−1　№33	10.0	4.0	4.8	外面竹文　コンニャク印　高台内面「大明年製」銘款・圏線有　畳付け砂目有	白　色	白　色	肥前　1690～1730年代
80	磁　器	染付碗	SE−1　一括	9.8	4.6	3.8	外面梅花に笹文　高台内面に「鳴福」　畳付け無釉	淡灰白色	淡灰白色	肥前　18世紀前半
81	磁　器	白磁人形	SE−1　一括		3.2		型取り成形　唐人	白　色	白　色	肥前　17世紀末～18世紀初頭
82	土製品	石燈籠	SE−2　一括		3.3	4.2	白色釉摩滅　六面燈籠	淡青白色		箱庭道具　関西系　18～19世紀
83	土製品	土人形	SE−2　一括	2.6	2.3	0.7	亀形	淡青灰色	淡青灰色	玩具　関西系　18～19世紀
84	瓦	瓦　玉	SE−2　一括		8.8	1.8	平瓦の2次利用	黒灰色		
85	瓦	瓦　玉	SE−2　一括		6.0	1.7	平瓦の2次利用	黒灰色		
86	瓦	瓦　玉	SE−2　一括		4.6	1.8	平瓦の2次利用	淡黒灰色		
87	瓦	瓦　玉	SE−2　一括		4.4	1.7	平瓦の2次利用	淡黒灰色		
88	瓦	瓦　玉	SE−2　一括		4.0	1.8	平瓦の2次利用	黒灰色		
89	石製品	硯	SE2　栗石内　一括	4.9	3.9	1.8	欠損品の再利用	淡青色	淡青色	
90	磁　器	染付碗	SE−3　SC−4　一括		4.8		見込み花模様　高台内面「大明年製」銘款	白　色	白　色	肥前　1670～1680年代
91	磁　器	染付碗	SE−3　一括		3.6		内外面二重圏目文	淡灰白色	淡灰白色	肥前　18世紀前半
92	陶　器	色絵碗	SE−3　一括		5.0		見込み赤絵有　畳付け露胎　高台内面竈隠し有	淡黄白色	淡黄白色	呉器手碗　肥前　17世紀末
93	陶　器	灯明皿	SE−3　一括	12.7	3.2	4.8	清縁皿　見込み胎土目積み痕有　底部露胎	淡緑灰色	淡緑灰色	肥前　1610～1630年代
94	陶　器	皿	SE−3　南区一括	6.5	6.6	2.7	内面濃飴釉・黄白色釉施釉　内面見込み「□□」銘　外面口縁周辺のみ施釉	濃飴色＋黄白色	明褐色	延岡・丸山焼　19世紀
95	磁　器	染付小皿	SE−3　北区最下層	20.2	10.2	7.2	内面雲龍文　外面雲文　畳付け釉剥ぎ	淡青白色	淡青白色	肥前　19世紀前半
96	磁　器	染付鉢	SE−3　一括	17.2	6.6	8.2	内面格子文　外面楓文　畳付け釉剥ぎ	淡青白色	淡青白色	肥前　1820～1860年代
97	磁　器	染付瓶	SE−3　SC−4　一括		5.2		外面草物文　底部露胎	淡青白色	淡青白色	肥前　1820～1860年代
98	陶　器	二彩大皿	SE−3　一括	31.4	11.6	7.0	内面波状文　見込み胎土目積み痕有　底部露胎	淡褐色	淡青褐色	肥前　17世紀後半

第7表　延岡城内遺跡（第3次）出土遺物観察表3

99	陶	器	火	鉢	SE−3 一括		23.2		外面線彫文	淡緑色	淡緑色	瀬戸美濃 18世紀後半～19世紀
100	磁	器	青磁人形		SE−3 南区下層		9.5		牛 内向に指紋多数	濃緑色	濃緑色	関西系 18～19世紀
101	陶	器	壺	壷	SE−3 一括	4.4		1.9	外面鉄釉 ツマミ	明褐色	明褐色	関西系又は福岡 18～19世紀
102	瓦		軒	丸瓦	SC−1 一括	16.7		2.5	連珠三巴文右巻16珠 圏線有 巴尾部は圏線に接しない	淡黒灰色		
103	瓦		軒	丸瓦	SC−1 一括			2.2	連珠二巴文左巻14？珠 圏線有 巴尾部は圏線に接しない	淡黒灰色		
104	瓦		軒	丸瓦	SE−3 一括		16.8		連珠三巴文右巻16？珠 圏線一部有	黒灰色		
105	瓦		平	瓦	SC−2 №23				内面端部面取り 側面「大吉」刻印	淡黒灰色		
106	瓦		平	瓦	SE−3 一括				表面黒母多量 側面「逆い釘抜き紋」刻印	黒灰色		表面は火災による受熱
107	瓦		平	瓦	SE−1 一括				側面「宮下新右衛門」刻印	黒灰色		
108	瓦		平	瓦	SC−2 一括				側面「古間新右衛門」刻印 淡黒灰色	淡黒灰色		
109	瓦		鯱	瓦	SC−1 一括			2.2	鱗部分	淡黒灰色		
110	瓦		軒	平瓦	SC−2 一括				瓦当唐草模様	黒灰色		
111	瓦		軒	平瓦	SF−2 一括			2.1	瓦当唐草模様	黒灰色		
112	瓦		？		SE−3 一括	14.4				黒灰色	黒灰色	
113	瓦		平	瓦	SC−2 一括	28.4	29.5	1.7	逆い釘抜紋の刻印	黒灰色		
114	瓦		平	瓦	SE−1 一括	27.4		1.6		黒灰色		
115	陶	器	擂	鉢	一括	29.5			無釉？	暗赤褐色	暗赤褐色	
116	陶	器	擂	鉢	一括		18.5		内面底部に4条の擂り目	赤褐色	赤褐色	明石
117	陶	器	擂	鉢	SE−2 栗石中		16.8			暗赤褐色	暗赤褐色	堺 18～19世紀
118	瓦質土器		火	鉢	SE−2 一括	33.4				淡黒褐色	淡黒褐色	18～19世紀
119	磁	器	白磁	碗	SF−1 一括				底部露胎	淡灰色	淡灰色	中国 12～13世紀
120	磁	器	染付火入		SF−1 一括				底部・高台内面露胎	淡青灰色	淡灰色	肥前 1630～1640年代
121	陶	器	皿		SF−1 一括				底部露胎 内外面胎土目積み痕有	暗褐色	淡褐色	肥前 1600～1630年代
122	陶	器	碗		SF−2 一括				内面鉄釉 外面薬灰釉	淡黄白色	暗黒茶褐色	福岡又は肥前 17世紀前半
123	磁	器	染付	皿	SF−2 一括				芙蓉手文	淡青白色	淡青白色	中国・景徳鎮窯 17世紀前半
124	陶	器	皿		SF−2 一括				内外面胎土目積み痕有	淡茶褐色	淡茶褐色	肥前 1600～1630年代
125	磁	器	染付	大皿	SF−2 灰白色粘質土				内面模様	淡灰白色	淡灰白色	肥前・山辺田窯 1630～1640年代
126	磁	器	染付	碗	SF−2 一括				内面無釉 外面風景文・貫入有	淡青白色	淡黄灰色	肥前 1630～1640年代
127	磁	器	青磁	天目茶台	SF−2 一括				畳付け釉剥ぎ	淡青灰色	淡青灰色	肥前 1630～1640年代
128	磁	器	火	入	SF−2 灰白色粘質土				内面無釉 外面施文	淡灰白色	淡赤灰色	肥前 1630～1640年代
129	磁	器	染付	皿	SC−2 №8	14.4	8.2	4.4	蛇ノ目釉剥ぎ凹高台 高台内面銘款	淡青白色	淡青白色	肥前 18世紀後半
130	磁	器	染付	碗	SC−4 一括				外面格様 内外面貫入有 畳付け釉剥ぎ	淡黄緑色	淡黄緑色	肥前 17世紀後半
131	陶	器	皿		SC−4 炭化物層				玉子手 内外面貫入有 見込み胎土目積み痕有	淡黄白色	淡黄白色	肥前・内野山窯 17世紀前半
132	磁	器	染付	碗	SC−4 SE−3 一括	15.2			刷花唐草文	白 色	白 色	肥前 1660～1670年代
133	陶	器		碗	SC−4 炭化物層				軟質胎土 外面緑釉	淡黄緑色	淡黄白色	肥前・内野山窯 17世紀後半

第8表 延岡城内遺跡（第3次）出土遺物観察表4

134	磁　器	五彩手碗	ＳＣ－4　一括		5.2		見込み笠字　高台内面二重圏線	淡青白色	淡青白色	中国	16世紀末～17世紀初頭
135	磁　器	青磁碗	ＳＣ－4　廃棄物層				外面蓮弁文	淡黄緑色	淡黄緑色	中国・龍泉窯	15世紀～16世紀前半
136	磁　器	染付猪口	ＳＥ－1　一括	6.0	3.6	4.1	高台内面「大明年製」銘款・圏線有	淡灰白色	淡灰白色	肥前	18世紀前半
137	磁　器	染付鉢蓋	ＳＥ－1　一括	12.0	3.8	3.3	花唐草文	淡青白色	淡青白色	肥前	18世紀前半
138	陶　器	甕　蓋	ＳＥ－1　№35	10.0	4.4	2.7	外面鉄釉	茶褐色	赤茶褐色	肥前	17世紀
139	磁　器	染付大皿	一括		11.8		内面山水文　畳付け釉剥ぎ・砂目有	淡青灰色	淡青灰色	肥前	1630～1640年代
140	磁　器	染付大皿	ＳＥ－1　№5		16.6		内外面貫入有　高台内国圏線有　畳付け釉剥ぎ	淡灰白色	淡灰白色	肥前	1670～1700年代
141	磁　器	白磁紅皿	ＳＥ－1　一括	2.2	1.9	1.1		白　色	白　色	肥前	17世紀後半～18世紀前半
142	磁　器	染付碗	ＳＥ－2　栗石中 ＳＥ－3　南一括				外面輪花文　内外面貫入有	淡橙灰色	淡橙灰色	肥前	17世紀後半
143	磁　器	染付碗	ＳＥ－2　栗石中	11.0	4.4	5.7	釉薬多い	淡青白色	淡青白色	瀬戸美濃	19世紀
144	磁　器	染付碗	ＳＥ－1　№31		4.0		高台内面「大明年製」銘款　畳付け釉剥ぎ・砂目有	淡灰白色	淡灰白色	肥前	18世紀前～中頃
145	磁　器	染付碗蓋	ＳＥ－2　一括	8.7	3.4	2.6	呉須滲む　釉薬多い	白　色	白　色	瀬戸美濃	19世紀
146	磁　器	染付小鉢	ＳＥ－2　栗石中	6.6	3.0	4.2	畳付け釉剥ぎ	白　色	白　色	関西系	1820～1860年代
147	磁　器	小　坏	ＳＥ－2　最下層	6.8	2.8	3.4	畳付け露胎	灰白色	灰白色	肥前	18世紀
148	磁　器	染付猪口	ＳＥ－2　栗石中	7.6	2.5	5.7	外面水裂花文	淡灰白色	淡灰白色	肥前	18世紀後半
149	陶　器	碗	ＳＥ－2　一括	11.0	4.0	5.6	ヒビ焼き(貫入)　畳付け釉剥ぎ・砂目有	灰白色	灰白色	肥前	18世紀後半～19世紀
150	陶　器	碗	ＳＥ－2　栗石中	11.2	3.8	5.0	内外面巻胴毛目　内外面貫入有　見込み蛇ノ目底部一部残存　畳付け砂目・剥ぎ取り時清結による一部剥落有	暗褐色	暗茶褐色	肥前	18世紀前半
151	磁　器	碗	ＳＥ－2　栗石中		4.2		蛇ノ目	暗褐色	暗褐色	肥前	18世紀前半
152	陶　器	碗	ＳＥ－2　栗石中	9.0	5.2	6.5	畳付け釉剥ぎ	淡黄色	淡黄色	肥前	17世紀後半～18世紀初頭
153	磁　器	色絵碗	ＳＥ－2　栗石中	16.6			呉須赤絵　赤絵一部剥落	白　色	白　色	中国・漳州窯	17世紀前半
154	磁　器	白磁紅皿	ＳＥ－2　栗石中	4.2	1.5	1.4		淡灰白色	淡灰白色	肥前	18世紀後半
155	磁　器	色絵人形	ＳＥ－2　栗石中				鶏	白　色	白　色	肥前	17世紀後半～18世紀初頭
156	磁　器	人　形	ＳＥ－2　栗石中				顔面褐釉　雄人　背中に穴有タイプ		淡青白色	肥前	1630～1640年代
157	陶　器	壺　蓋	ＳＥ－2　栗石中	5.6	2.6	2.3	外面鉄釉	暗黒茶褐色	暗赤褐色	肥前又は福岡	18世紀？
158	陶　器	皿	ＳＥ－2　栗石中				軟質陶器　型打魚形　内面褐釉	明褐色	淡赤褐色	関西系	
159	陶　器	楪木鉢	ＳＥ－2　栗石中	15.0			内面口縁鉄釉　外面鉄釉	黒茶褐色	黒茶褐色	瀬戸美濃	18～19世紀
160	磁　器	染付碗	ＳＥ－3南　一括				外面網目文　見込み二重圏線有　高台内面圏線有	白　色	白　色	肥前	1660～1670年代
161	磁　器	染付碗	ＳＥ－3南　一括	10.0	3.8	4.6	外面赤松文　内外面貫入有	淡青白色	淡青白色	肥前	18世紀前半
162	磁　器	染付碗	ＳＥ－3　一括	12.4	5.2	7.4	外面風景文　見込み模様　内外面貫入有　畳付け釉剥ぎ・砂目有	淡青緑色	淡青緑色	門川・鹿川窯？	19世紀
163	磁　器	青磁染付碗	ＳＥ－3北　最下層				見込み模様　底部露胎	淡緑色	淡青灰色	肥前	1630～1640年代
164	磁　器	広東碗蓋	ＳＥ－3北　一括	5.8	10.6	2.7	ツマミ内面唐人文	白　色	白　色	肥前	1780～1810年代
165	磁　器	染付小坏	ＳＥ－3北　下層	7.0			端反碗　外面模様・口縁端部1列圏線有	白　色	白　色	中国・景徳鎮窯	18世紀前半

第９表　延岡城内遺跡（第３次）出土遺物観察表５

166	陶	器	小	坏	SE−3南	一括	6.6	3.0	3.1	見込み「無」又は「缶」?文字 内面貫入有 底部露胎	暗緑色	淡黄色	延岡・丸山焼 19世紀
167	磁	器	猪	口	SE−3	一括	7.2	4.0	5.1	外面銹絵鳥文・2列篦彫 底部露胎 削高台3カ所	淡茶褐色	淡茶褐色	関西系 18世紀後半〜19世紀
168	磁	器	色絵角皿		SE−3南	一括			3.9	雲龍文	白 色	白 色	肥前 18世紀前半〜末頃
169	磁	器	染付皿		SE−3	一括				内面芙蓉手文 畳付け釉剥ぎ	淡青白色	淡青白色	肥前・長吉谷窯 輸出仕様 1655〜1670年代
170	磁	器	染付皿		SE−3	下層		12.2		高台内面「成□□□」銘款 畳付け釉剥ぎ	淡青白色	淡青白色	肥前 18世紀前〜中頃
171	磁	器	青磁皿		SE−3	一括	13.0	5.2	3.3	見込み釉剥ぎ 底部露胎	淡青緑色	淡青緑色	肥前・波佐見 17世紀後半
172	磁	器	皿		SE−3南	一括				見込み蛇ノ目釉剥ぎ 底部露胎 畳付け砂目有	淡青緑色	淡青緑色	肥前 17世紀後半
173	陶	器	皿		SE−3北	最下層	15.2	4.5	3.2	内外面胎土目積み痕 底部露胎	淡 赤 茶褐色	淡 赤 茶褐色	肥前 1610〜1630年代
174	陶	器	皿		SE−3	一括	13.8	4.4	3.6	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 底部露胎	淡灰白色	淡灰白色	焼成不良 肥前 1630〜1670年代
175	陶	器	鉢		SE−3	一括		12.4		内面白土刷毛目 外面露胎 畳付け砂目積み痕有	淡褐色	淡褐色	肥前 17世紀後半
176	陶	器	擂	鉢	SE−3	一括	23.6	11.8	8.6		赤褐色	赤褐色	雾 18〜19世紀

第10表 延岡城内遺跡（第3次）出土遺物観察表6

PL.39 南方中学校発掘体験

自然科学分析調査報告書

株式会社　古環境研究所

延岡城内遺跡（第３次）調査における放射性炭素年代測定結果

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

試料名	地　点	種　類	前処理・調整	測　定　法
No１	土壇４	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（ＡＭＳ）法
No２	大溝遺構	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（ＡＭＳ）法

２．測定結果

試料名	$\delta^{13}C$ (‰)	補正^{14}C年代（年ＢＰ）	暦年代（西暦）	測定No
No１	−25.5	235±30	交点:cal AD 1655 1σ:cal AD 1645～1665, 1785～1790 2σ:cal AD 1640～1675, 1775～1800, 1940～1945	NUTA2−2385
No２	−23.8	350±30	交点:cal AD 1515, 1600, 1615 1σ:cal AD 1480～1525, 1555～1630 2σ:cal AD 1450～1640	NUTA2−2381

１）$\delta^{13}C$測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

２）補正^{14}C年代値

現在（1950年ＡＤ）から何年前かを計算した値。$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、試料の^{14}C／^{12}C比の測定値に補正値を加えた上で算出した。^{14}Cの半減期は国際的慣例に従い5,568年を用いた。

３）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのＵ－Ｔｈ年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

報告書抄録

ふりがな	のべおかじょうないいせき
書名	延岡城内遺跡　I
副書名	日向延岡新産業都市・都市計画街路本小路通線改良にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
著者名	山田　聡
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2－1
発行年月日	2002年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡（第3次）	宮崎県延岡市本小路77－1	452033	3018	32°34′44″	131°39′50″	2000/05/16～2000/07/28	147.0㎡	公共施設建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城館跡	江戸時代	井戸遺構　2 土壙　4 溝状遺構　3 ピット群	瓦類（軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦）、国産陶磁器類、輸入陶磁器、土師器、古銭（寛永通宝）、石製品（碁石）	郭内の武家屋敷地において、初例となる本格調査。土壙より近世前半の一括資料出土。内堀に接続すると推定される大溝検出。

延岡城内遺跡Ⅰ

－日向延岡新産業都市・都市計画街路本小路通線改良にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－

延岡市文化財調査報告書第26集

2002年3月31日

発行　延岡市教育委員会

宮崎県延岡市東本小路2－1

印刷　有限会社　河野印刷

宮崎県延岡市川原崎町453